

明治維新 150 年記念日本遺産講演会

日新塾を考える

記録集



2019年2月

水戸市

明治維新 150 年記念日本遺産講演会

日新塾を考える

記録集

2019年2月

水戸市



あいさつ

日新塾は、江戸時代後期に成沢村の庄屋で水戸藩郷士の加倉井砂山が主宰した私塾です。砂山が教育を始めたのは20歳頃と言われていますが、砂山の優れた教育はまたたく間に評判を呼び、22歳の頃には、開設当初に塾舎としていた居宅では、門人を収容しきれないほどとなり、新たな塾舎を新築するなど日新塾の隆盛ぶりには目を見張るものがありました。

門人数は延べ千人以上であったと考えられておりますが、日新塾以外で千人規模の塾生を擁した私塾は、国内を見渡しても大分県日田市の咸宜園かんぎんと大阪府大阪市の適塾てきじゆくなど、町から通学しやすい距離に立地している私塾に限られていました。こうした中、水戸城下から約10kmも離れ、必ずしも通学しやすい環境ではなかった日新塾に、千人以上もの門人が学びに来ていたことは驚異的なことであり、近世の私塾の中でも特色ある傑出した存在として全国的に名を馳せていました。

本市では、こうした日新塾の歴史的・文化財的価値を将来の世代へと着実に伝えるため、所有者である日新塾精神顕揚会と連携を図りながら、発掘調査を継続的に進め、平成21年度には敷地全体を市の史跡に、平成25年度には出土したオランダ陶器と加倉井砂山夫妻の墓を市の有形文化財に指定するなど、保護・保存に努めています。

また、地域の団体である水戸北ライオンズクラブの皆様からも、史跡へと誘導する案内板や史跡の価値を伝える説明板・パネルの寄贈を受けるなど、官民一体となった取組を進めています。

そして、平成27年早春には、文化庁が新たに創設する日本遺産に「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」と題するストーリーを足利市・備前市・日田市と共同申請し、同年4月に弘道館や偕楽園等とともにストーリーを構成する文化財のひとつとして、日新塾跡は日本遺産第1号認定を受けました。

この度の講演会では、3名の講師から江戸時代の私塾に関する総論、加倉井砂山と日新塾の教育、水戸市が実施した日新塾跡の発掘調査成果について講演と報告をいただきました。当日参加された方も参加できなかった方も、本記録集をご一読いただき、日新塾と加倉井砂山の教育についてご理解を深めていただければ幸いです。

2019年2月

水戸市長 高橋 靖

例 言

- 1 本書は、平成30(2018)年12月1日の午後1時から午後5時に水戸市総合教育研究所3階の視聴覚ホールにおいて開催した「明治維新150年記念日本遺産講演会 日新塾を考える」の記録集である。
- 2 講師は、橋本昭彦氏(国立教育政策研究所教育政策・評価研究部総括研究官)、鈴木暎一氏(茨城大学名誉教授)、関口慶久氏(水戸市埋蔵文化財センター所長)に依頼した。また、基調講演及び報告終了後には、加倉井孝臣氏(一般財団法人日新塾精神顕揚会理事長)より挨拶及び講評をいただいた。
- 3 本書の編集は、水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課世界遺産推進室の鈴木重文と川口武彦が担当し、鈴木が講演記録の文字起こし及び校正を、川口が表紙デザイン及び本文・図版等のレイアウトを担当した。
- 4 裏表紙の加倉井砂山肖像画は、所有者である鈴木美明氏からご提供いただいたものである。

目 次

あいさつ

例 言

目 次

講師プロフィール

第1部 当日配布資料	1
基調講演1 「近世日本における「塾」という空間」	橋本昭彦 2
基調講演2 「加倉井砂山と日新塾の教育」	鈴木暎一 6
基調報告 「日新塾を掘る」	関口慶久 13
第2部 講演の記録	33

講師プロフィール

橋本昭彦

昭和34（1959）年大阪府生まれ。広島大学大学院教育学研究科博士課程に進学。広島大学教育学部の助手を経て、国立教育研究所へ入所。以後、主任研究官や教育史・教育理念研究室長などを経て、現在は、国立教育政策研究所教育政策・評価研究部総括研究官。世界遺産関係では足利市世界遺産検討会議の座長を務める。日本及び欧米の試験制度、学習観・学校観等を文化交渉史の方法で研究している。

主な著作：『江戸幕府試験制度史の研究』風間書房（1993）、『昌平坂学問所日記1』斯文会（1998）、『昌平坂学問所日記2』斯文会（2002）

鈴木暎一

昭和14（1939）年茨城県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科国史学専門課程修士課程を修了後、国立茨城工業高等専門学校、茨城大学、常磐大学にて教鞭を執り、茨城大学名誉教授。茨城県文化財保護審議会議長、旧弘道館保存活用計画検討委員会委員長などを歴任。現在は、水戸市歴史的風致維持向上計画協議会会長、水戸市世界遺産登録検討専門委員などを務める。

主な著作：『水戸藩学問・教育史の研究』吉川弘文館（1987）、『水戸弘道館小史』文眞堂（2003）、『徳川光圀（人物叢書 日本歴史学会編）』吉川弘文館（2006）

関口慶久

昭和48（1973）年千葉県生まれ。水戸市埋蔵文化財センター所長。専門は日本考古学。

第1部

当日配布資料

近世日本における「塾」という空間

橋本昭彦（国立教育政策研究所教育政策・評価研究部総括研究官）

加倉井砂山と日新塾の教育

鈴木暎一（茨城大学名誉教授）

日新塾を掘る

関口慶久（水戸市埋蔵文化財センター所長）

基調講演 近世日本における「塾」という空間

橋本 昭彦 soubun@white.plala.or.jp

(足利市世界遺産検討会議 座長、
国立教育政策研究所 総括研究官)

1 まえおき

- ・江戸時代～「大開発」の時代の社会変化 【資料1】
- ・日本人の「学識」～外国人の記録・証言から
- ・身分に関わりないお稽古好き・学習好き 【資料2】江戸師匠の人名録

2 「塾」ということば

- ・広漢和：もんべや。門の両側の小部屋で家中の者を教えた。音は「孰」
- ・「手習塾」＝いわゆる寺子屋、「学問塾」＝漢学塾、洋学塾、国学塾、医学塾など
- ・「寺子屋」「私塾」「藩校」という分類自体は、明治以後に通用 【資料3】
- ・必ずしも「～塾」とは名乗らない 【資料4】主な私塾の名称

3 「塾」の歴史 ～近世教育機関の一つの基本型か

- ・起源は不明。「藩校」よりは古くからあり、藩校の消滅後も存在
- ・「藩校」といっても「塾」を取り込んだものも少なくない
例：笠間藩の時習館＝文化14年(1817)、秋元凌郊(しゅんこう)の私塾を藩校とした
例：岩槻藩の還翁館(埼玉県)＝文化年間に児玉南柯の私塾を藩校とした
幕府の昌平坂学問所も、林家塾から学問所へと展開 【資料5】

4 「塾」の多様化

- ・儒学、洋学、国学、医学、兵学、その他
- ・地域で発展した塾が多い →全国展開の有名塾も 【資料6】門人の出身圏
- ・同志の「勉強会」に近いものも
例：幕臣・近藤重蔵の「白山義塾」や幕臣・三島政養(まさきよ)の勉強会など
- ・塾の規模も教育内容もレベルもまちまち。結果中心・評判中心で評価が定まる

5 教育の全国システム

- ・幕藩体制の行政文書の書式や書体に共通性 → 「書き方」の学習に共通性
 - ・師匠や学習者の全国的ネットワーク → 【資料6を再参照】
 - ・塾などの学校間交流や影響関係
例：成宜園の「月旦法」の伝播 【資料7】
- 多様な学び手に対応する仕組み
→保存状態などの良好な4資産で世界遺産登録を目指している

6 終わりに

- ・塾の歴史は不明の部分が多い、細部こそ大事、研究は無限

橋本昭彦氏講演要旨

近世日本における「塾」という空間

担当： 橋本 昭彦 soubun@white.plala.or.jp

【資料1】江戸時代～「大開発」の時代の社会変化

	江戸初期(1603)のころ	享保(1716-1736)のころ
人口	1000万～1200万	3128万人(1721年)
耕地面積	206万町歩	297万町歩(1730年頃)
人間関係	従来は、血縁・地縁が主(見える人間関係)	契約・為替・手紙の普及(文書化・ネットワーク化)
文書量	法令、行政文書、契約書、通信が増加	さらに増大

大石慎三郎(1923-2004)『江戸時代』、中公新書、1977、をもとに橋本作成

【資料2】江戸の師匠の人名録(1860年頃)

教授内容

画 儒算 儒書

宥 逸 齋 齋 名 前

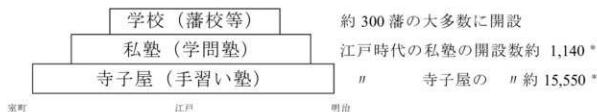
在宿日時 在宿二七 在宿八ツ前

住所

樋口逸齋 1812-1877 江戸後期-明治時代の書家。幼時から父にまなぶ。頼山陽に師事して詩文もよくした。名は観之。字(あざな)は子順。通称は昌介。

『安政文雅人名録』1860年頃、早稲田大学付風園書館所蔵。「樋口逸齋」は『日本人名大辞典』より一部引用。

【資料3】寺子屋（手習い塾）→私塾（学問塾）→武士の学校（藩校等）



* 数値は文部省『日本教育史資料』（1890）

【資料4】主な私塾の名称

主な漢学塾（他県）

菫園塾（東京） - 荻生徂徠
 長善館（新潟） - 桂湖村
 藤樹書院（滋賀） - 中江藤樹
 古義堂（京都） - 伊藤仁斎
 懐徳堂（大阪） - 中井菴庵
 泊園書院（大阪） - 藤沢東峯
 松下村塾（山口） - 吉田松陰
 咸宜園（大分） - 広瀬淡窓
 心学講舎（東京他） - 石田梅岩

主な国学塾

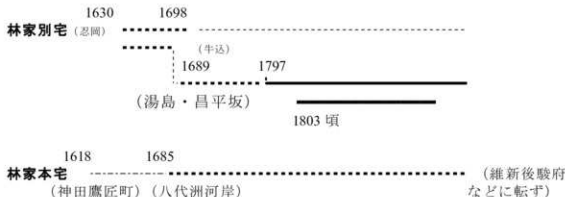
和学講談所（東京） - 塙保己一
 鈴屋塾（三重） - 本居宣長

主な洋学塾

芝蘭堂（東京） - 大槻玄沢
 慶應義塾（東京） - 福澤諭吉
 適塾（大阪） - 緒方洪庵
 鳴滝塾（長崎） - シーボルト

【資料5】林家塾から昌平坂学問所への展開

施設名（場所） 林家塾 ——— 昌平坂学問所 ——— 昌平坂学問所書生寮



加倉井砂山と日新塾の教育

鈴木 暎一

1. 日新塾は加倉井砂山（文化2（1805）年～安政2（1855）年：享年51）が茨城郡成沢村西坪（水戸市成沢町）の自宅に開いた私塾。門人数，設備，教育科目 — 水戸藩最大規模の私塾。北関東でも随一か。

 - ・砂山 — 諱（いみな）は，久雍のち雍，字は立脚，通称は淡路，砂山のほか西軒，頼菴（らいあん），不知老齋の号。
 - ・父は久泰。砂山はその次男。
兄久継が文政3（1820）年，27歳で死去。
→ 16歳で家督を継ぐ（出府の意志を断念）
 - ・加倉井家は代々同村庄屋。この地方の素封家・名望家
久泰 — 郷士（50石）→ 西坪に家を新築 → 天保10（1839）年没（79歳）
2. 砂山 — 天保10（1839）年 全隈村兼帯庄屋
天保12（1841）年 山横目兼務
天保14（1843）年 格歩行士列

→ 同村同族の加倉井忠珍に学ぶ

 - ↳ 立原翠軒 → 山本北山
↳ 亀山鵬齋
 - ・家督を継ぎ，郷村子弟の教育に専念。
はじめ，父の私塾（門弟20～30人）の補佐役。
→ 20歳頃から父に代わって責任をもつ立場に。
3. 門人の増加

 - ・文政9（1826）年 22歳 — 塾舎三楽楼（3間5間の2階建て）
↓
会沢正志齋「君子有三楽」揮毫
 - ・天保13（1842）年 38歳
借楽園好文亭落成 — 斉昭，詩会開催
→ 砂山の名声も高まる。

- ・塾舎有隣館増築（4間6間の平屋造り）
行伍塾，万甫楼，日新舎も
「三楽楼，不知老斎，行伍塾，万甫楼，有隣館，日新舎，皆書齋名也」
（興野道甫の砂山墓碑銘草稿中にある文章）

4. 30余年に及ぶ教育活動，その門人数は？

- ・「子弟三千各長苗」（102人～60人）
嘉永元（1848）年 44歳 8月10日 —— 72人
8月11日 —— 75人
同3年 2月11日 —— 60人
? 15日 —— 91人
16日 —— 102人
17日 —— 70人
6日 —— 81人
7日 —— 84人
8日 —— 73人
9日 —— 70人

- ・近郷2里半くらいまで —— 通学範囲
寄宿生 —— 30～40人？
「茶話睦講」 —— 近郷の老若男女に。

5. 教育方針 —— ①個性の尊重（墓碑名参照）

②時代の進運に即応する教育

- ・「おのか唐学のみおや加倉井淡路のきみハ，歌よむわさハさらなり，五十とせはかりのをり，蘭学し玉ひ，いとまのみをりにハ，和蘭字うつし学び玉ひけるに，とみにみ病ひにてみまかり玉へるゆゑにえとけたまハすなん」
（興野道甫「道志留倍」より）

道甫は文政元（1818）年生まれ，茨城郡高久村組頭加藤木信衛門の長男。21歳の時興野助右衛門の養子となる。12歳で入門。のち塾長。

- ・道甫，袴塚翁（山横目袴塚重右衛門か？）の紹介で入門。
「初て文選はかく大学ハかくといふことををしへられたり，いといとうれしき事になん・・・このころハ故郷の実家殊に窮たるときにて麦米ハ勿論なへてのくひもの都てとほし，大勢の子供にていかにもくらしかねたり，孝経一卷かひもとめたくおもひけれともそをもとむる力なくてなん，孝経の価ハ百四十位なるへきにあハれなるさまなり，油もしははたへて寒中夜着となんいへるものをきて庭にいててふみよみたりき，加倉井先生ハもちろん袴塚翁にもとしの暮にハそれぞれ謝礼をもすへき事侍れと一文もなければ抛なくて汗となかき，先生ハいととふとき人にて礼記の貧者不

以昧といへるをひき玉ひて仰られたる事ありき、そのうれしさいまに忘草のいかに忘れ侍るへき、おのれふみこのめるをめてたまひて、とまりなハこのふみをしへたまふへしと被仰き」（無題の小冊子）

6. 教育科目〈文武共習が特色〉

- ・学芸 —— 読書、習字、作詩、作文、歴史、地理、窮理、兵学、時事問題（往來物、「実語教」→四書・五経 →「平家物語」・「太平記」、「史記」・「資治通鑑」・記紀・「万葉集」・「古今和歌集」）
 - ・武芸 —— 剣術、砲術、馬術、教練
 - ・その他 —— 医書多数所蔵（茨城県立歴史館に624部、1824冊。大部分が医書。）
 - ・実地訓練
 - 十萬原（水戸市）、徳化原（城里町）
 - 鉄砲の稽古 —— 月の5の日、邸内に射的場あり。（屋敷配置図参照）
 - 剣術は神道無念流
 - 乗馬 —— 馬3頭飼育（7の日）
- ↓
天保14（1843）年3月、斉昭に扈從して出府 → 高島流砲術を修め帰る。

7. 藩内は党争が次第に激化の時勢

- ・一党一派に与することを嫌い、党派を超越して教育に専念。
「烈公の冤罪を蒙るに、藩士党を建てて相軋す。……藩党正と称し奸と称す、……遂にこれを度外視す。」（「砂山先生伝」石川忠和「砂山詩纂」より）
- ・砂山自筆の書簡（別紙参照）

8. 主友・門人たち

- ・興野道甫、光岡多治見、斎藤監物、川崎八右衛門、香川敬三、藤田小四郎、飯田軍蔵、石川忠和など。
- 様々な人勢航路、地方の私塾の門人群像

9. 砂山の教育の影響

- ・郷村社会の生活に深く根を下ろして家業に励み、教育に専念
→ 砂山の精神を各地に伝え広めたこと
- ・中には尊攘思想の洗礼を受けて、政治意識に目覚め、現状打破を叫ぶ志士に。
- ・実業家や医者としての活動を通じ地域に貢献。



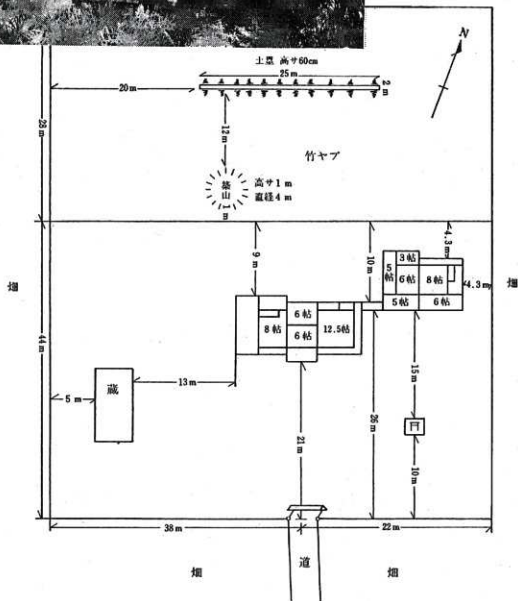
「青門肖像」(一部)水戸市立博物館寄託(水戸市立図書館所蔵)

鈴木暎一氏講演資料②

第16図 加倉井砂山宅（正面）



第17図 加倉井砂山宅配置図（現況）



『水戸市史中巻（三）』より転載

鈴木暎一氏講演資料③

平成30年12月1日(土) 明治維新150年記念日本遺産講演会

於 水戸市総合教育研究所

日新塾を掘る

- 1 加倉井家と砂山の生涯
- 2 日新塾を知るために
- 3 近世の日新塾
- 4 近代の日新塾
- 5 まとめ

水戸市埋蔵文化財センター 関口慶久



1



2



3



4



5



6

嘉慶2年(1388)年頃
波木井通久が
江戸氏重臣となり
加倉井姓を称する

7

約150年後
室町時代後期

8

加倉井本家
第12代当主重久の弟
加倉井淡路守忠光

9

享祿3(1530)年分家
成沢に館を賜る
↓
成沢加倉井氏の成立

10



11



12

2代 石見守忠久

→成沢山蓮聖寺
(日蓮宗)建立
現在の加倉井家墓所

13

3代 久行

4代 友久

5代 常久

14

6代 兵左衛門久通

→成沢村庄屋?

15

7代 兵左衛門久氏

16

8代 兵左衛門ひさあき久徴

→郷土取立(家録50石)
文化6(1809)年
第7代藩主治紀が御成

17

9代 兵左衛門久泰

→ 私塾(後の日新塾)
を創設

18

10代 兵左衛門久継

砂山の兄
27歳で早世

19

11代 淡路久雍(砂山)

16歳で家督を継ぐ
天保10(1839)年
又隈村庄屋



20

砂山の学歴

- 幼少期:父久泰に学ぶ
- 11歳~18歳頃:加倉井松山に学ぶ
- 江戸遊学を志すも断念
- 郷村の子弟教育に専念
- 文政7(1824)年 私塾経営を継承

21

安政2(1855)年7月14日
病没 享年51歳



加倉井砂山夫妻の墓
(蓮聖寺跡・市指定文化財)

22

2
日新塾を知るために

23

日新塾を知るために
ポイントとなる3つの資料

24

絵図資料・伝記資料・考古資料

25

1 絵図:『贈正五位加倉井砂山先生略傳』絵図

2 伝記:弓野國之助『加倉井砂山』

3 考古:発掘調査資料

26

1 絵図資料:
『贈正五位加倉井砂山先生略傳』絵図



27

『贈正五位加倉井砂山先生略傳』絵図

- 昭和3年、昭和天皇即位の礼にあわせ砂山が追贈「贈正五位」となる
- 記念誌『贈正五位加倉井砂山先生略傳』刊行(非売品)



贈正五位加倉井砂山先生略傳

28

『贈正五位加倉井砂山先生略傳』絵図

- 口絵に「日新塾の図面」が掲載
- 「茨城郡成沢村に於ける先生の住居及日新塾の略図でありまして、明治十年全焼したれど、図面は幸いにして厄を免れました」

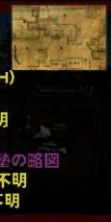


29

『贈正五位加倉井砂山先生略傳』絵図

資料の真正性は?(5W1H)

- いつ描かれた?→不明
- どこで描かれた?→不明
- 誰が描いた?→不明
- 何を描いた?→母屋と塾の略図
- 何のために描いた?→不明
- どのように描いた?→不明



30

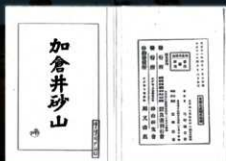
『贈正五位加倉井砂山先生略傳』絵圖



- 近世日新塾の配置を記した唯一の資料→現在の意義は大きい
- 5W1Hがよく分からない
- 現存しないため、真正性の再検証が難しい謎の図面
- 慎重に取り扱う必要がある

31

2 伝記資料： 弓野國之助『加倉井砂山』



32

弓野國之助『加倉井砂山』



- 弓野國之助：城里町石塚出身の教育者・記者・郷土史家
- 砂山の事績が人々の記憶から薄れていくことを憂い、伝記を新聞「いはらき」に連載(全77回)
- 連載をまとめ、大正11年に『加倉井砂山』を刊行

33

弓野國之助『加倉井砂山』



- 当時残っていた砂山関連資料とともに、門下生、親族、古老の聞き取り調査も盛り込まれる
- 現在では知ることのできない貴重な情報
- 全400ページ、砂山研究の第一の書

34

3 考古資料：発掘調査資料



35

発掘調査資料

- 平成16～27年度
にかけて、全8回の
発掘調査を実施



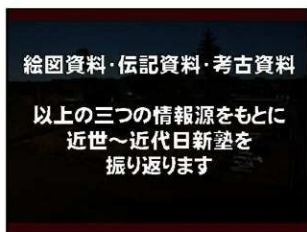
36



37



38



39



40



41



42



43



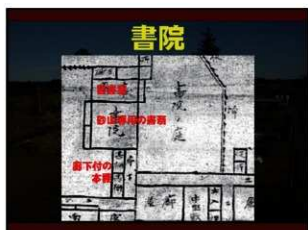
44



45



46



47



48

三楽楼・有隣館



有隣館：天保13(1842)年建設
→平屋建て(4間×6間)。

49

三楽楼・有隣館

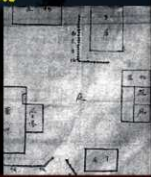


発掘調査では発見されていない

50

厩

馬は3頭飼置き、乗馬の稽古に供す



51

育昭上覧場

天保11(1840)年7月検地に伴う日新塾御成

此日は俄天気で、焦り焦り照りつける所に公等は野立ちして、検地を御覧になって居たか…



52

塀の柵列



53



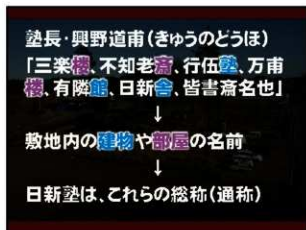
農作物貯蔵遺構
→塾生が食糧をまかなうための遺構か？



54



55



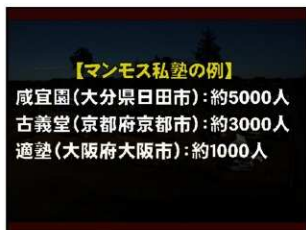
56



57



58



59



60

咸宜園の場合



61

咸宜園の場合



62

古義堂の場合



63

古義堂の場合



64

適塾の場合



65

適塾の場合



66

マンモス私塾の一般的傾向

- 塾(主)の教育的魅力
- 通いやすさ

片道10kmの農村に立地する日新塾
は異色の存在

67

砂山没後

- 長女秀子(桃溪)が近郷の子弟教育を継統

※長男久社は那珂湊合戦で戦死

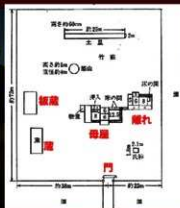
- 明治10(1877)年、日新塾焼失
→間もなく再建=近代日新塾

68

4 近代の日新塾

69

近代 日新塾 の建物



70



71

母屋(近代)



72



73



74



75



76



77



78

近代日新塾の建物

- 離れ・板蔵：近世建造物
- 母屋・蔵・門：近代建造物
→ 建築手法はきわめて伝統性が強い

79

近代日新塾の意義

- 教育が行われた記録はない
- 伝統性の高い近代建物群は砂山の遺徳を慕う者のシンボルに
- 砂山の名声は近代以後に確立
- 近代日新塾はその象徴的存在

80

日新塾出土オランダ陶器 (市指定文化財)

- 明治のゴミ穴から出土
→ 購入は近世、廃棄は近代
- 僅かな欠けを漆で焼き繕ぐ
→ 砂山の遺品として継承か



81

近代日新塾の盛衰

- ・ 大正10年 新聞「いはらき」誌上で加倉井砂山の連載(77回)
- ・ 昭和3年 砂山に正五位を贈位
- ・ 昭和17年 財団法人日新塾精神顕揚会設立

82

近代日新塾の盛衰

- ・ 昭和58年 読売新聞「日新塾が崩壊寸前」
- ・ 昭和62年 地元有志による加倉井砂山顕彰会が設立
- ・ 昭和63年 森林公園に銅像建立
- ・ 平成16年 建物解体



83

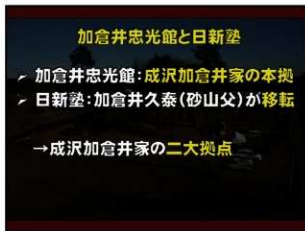
近代日新塾の盛衰

- ・ 平成16～28年 市の発掘調査
- ・ 平成21～26 相次ぐ市文化財指定
→ 日新塾(史跡)、棟札(歴史資料)
加倉井砂山夫妻の墓(歴史資料)
出土オランダ陶器(考古資料)
- ・ 平成27年 日本遺産認定

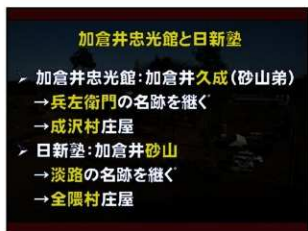
84



85



86



87



88



89



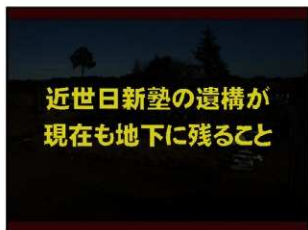
90



91



92



93



94



95



96

近世・近代の遺跡が
重層的に残ることが重要

97

絵画資料や伝記資料
写真資料などで
補完しあいながら

98

近世～近代の
日新塾の歴史と

99

旧成沢村の歴史を

100

豊かに描き出すために
不可欠な遺跡

101

日本遺産
「近世日本の教育遺産群」
のストーリーを担う
教育遺産の一つとして、

102



103



104



105



106



107

日新塾関係の指定文化財

日新塾跡

所在地：水戸市成沢町 337-3、361-5、364

管理者：一般財団法人日新塾精神顕揚会

年代等：江戸時代

面積：2,522.48㎡

指定区分：市指定（史跡）

指定年月日：平成 21 年 2 月 6 日

説明：日新塾は江戸時代後期、成沢村庄屋の加倉井砂山によって開かれた私塾です。学科は読書、算数、歴史、理科、乗馬、砲術、練兵、撃刺、詩文など文武両道を練磨する多様なもので、全国から入門者や道学の徒が集りました。平成 16 年以後、水戸市教育委員会による発掘調査が 5 次にわたり実施されており、その調査結果では、近代母屋の礎石がほぼ全面検出され、さらにその直下から近世母屋の礎石が確認されました。



日新塾母屋棟札

所在地：水戸市大町 3-3-20

管理者：一般財団法人日新塾精神顕揚会（水戸市立博物館寄託）

年代等：江戸時代

指定区分：市指定（歴史資料）

指定年月日：平成 22 年 2 月 18 日

説明：解体された日新塾の母屋から発見された、縦 38cm、横 11.1cm の棟札です。工事の残材を用いたと思われるほぼ長方形の杉板の裏面に、ほぼ同文の墨書があり、天保 12 年の修繕の原に記されたものです。文章は表に 5 行、裏に 6 行、ほぼ板面一帯に書かれています。裏面には中央に × 印が描かれており、初めに裏面の文を記し、これを修正して表の文としたものと思われます。現状は、表面の文字は薄れていますが、裏に接していた裏面の文字はよく残っており、明瞭に判読できます。板には釘穴が 3 箇所（上部に 1 つ、下部に 2 つ）あり、下部の穴は小さな録痕とも見られます。



日新塾跡出土オランダ陶器

所在地：水戸市塩崎町 1064-1

管理者：水戸市

年代等：江戸時代

指定区分：市指定（史跡）

指定年月日：平成 25 年 10 月 25 日

説明：日新塾は、江戸時代後期の儒学者で教育者でもあった加倉井砂山が主宰し、長女秀子に継承された水戸藩を代表する私塾です。日新塾においては、個性と自主性を尊重した教育方針を掲げ、多彩な教育科目を備えた教育環境の中で学んだ門人は、千人を超えたともいわれています。本物件は、日新塾跡の発掘調査時に出土したものであり、県内唯一のオランダ陶器の出土例として、また、日新塾における洋学摂取を裏付ける物証として、貴重な価値を有します。



第2部

講演の記録

近世日本における「塾」という空間

橋本昭彦（国立教育政策研究所教育政策・評価研究部総括研究官）

加倉井砂山と日新塾の教育

鈴木暎一（茨城大学名誉教授）

日新塾を掘る

関口慶久（水戸市埋蔵文化財センター所長）

講評・挨拶

加倉井孝臣（一般財団法人日新塾精神顕揚会理事長）

基調講演1 「近世日本における「塾」という空間」

橋本 昭彦氏（国立教育政策研究所教育政策・評価研究部総括研究官）

皆様こんにちは。ただいまご紹介いただきました、国立教育政策研究所の橋本昭彦と申します。職場の名前がとても長く、皆様にいつもご苦勞をおかけします。これが茨城大学や東京大学というように、分かりやすい名前だと自己紹介もし易いのですが、いつも自分でも難儀しています。

私は、広島大学で、三好信浩先生と言われる、一時期、茨城大学でもご教鞭をとられた先生に教わりました。高校生の時に、どうして勉強してするのだろうか、という疑問があり、それを明らかにするために将来は教育学者になりたいと思いました。大学教授になりたいと考えていました。大学院で学んでいた時には、小中学校時代の同窓生によく言われていたのは、「お勉強が好きなんだねえ、ということでした。自分ではそういうつもりもありませんでした。」

ここで、2つ質問をしますので、手を挙げてお答えください。まず、「勉強が好きだ」という方は手を挙げてください・・・（笑い声）。皆さん、手が挙がる代わりに笑い声が。皆さん、正直に挙げてくださった方が5人ぐらい、ありがとうございます。では次に、「私は学ぶことが好きだ」という方は手を挙げてください・・・（半分近くの手が挙がる）。あら、挙げてくださってますね。皆様、ご協力ありがとうございます。このように、「勉強が好きだ」とはあまり言わない方でも、「学ぶことは好きだ」とお答えになる方は良くいらっしゃいます。私が講演等でこのような質問をしたのは3回目ですが、3回とも同じような結果でした。その理由がどうしてなのかと考えてみると、「勉強」という言葉は漢語であり、何をするのかかわからないが、「勉め強い」もの、勉めくるしむものと思ってしまうところがあります。それに対して、「学ぶ」という言葉は、見て真似る、真似て学ぶ（まねぶ）というように、というように自分がある。主体的な自分がある。自分と関係のあることをするから楽しいのです。

私は一人子どもがおります。子どもを育てる上で二つの願いがありました。一番の願いは、「日々の生活を無事に過ごして欲しい」ということですが、もう一つの願いが、「日々の生活を退屈せず過ごし



橋本昭彦氏講演風景

て欲しい」ということなのです。「退屈な時間を無くし、いつも楽しくいてくれ」という親としての思いが、いつもありました。皆さんご自身も、誰しも退屈な時間は過ぎたくないでしょう。その様な思いもあり、私は、勉強で苦しむよりは、学ぶことを楽しみたいと思っています。

今回の私の講演の目標としまして、まずは、「塾」とうもののイメージを皆さんにもっていただくことです。塾というものが、どのようなものなのか、皆さんはもうすでに様々なイメージを持っていると思いますが、私の話を聞く中でそのイメージを改めて持っていただければと思います。

1 江戸時代のイメージ

では、具体的に講演の内容に入っていきますが、今回は資料の通り5つの構成になっています。どうもこの講演は、前置きの部分が長くなります。これも釈迦に説法かも知れませんが、色々な本からの受け売りも多くありますが、皆様にまずは、江戸時代がどんな時代なのか。江戸時代、といったときのイメージとして、私の考えることをお話しします。

江戸時代は、大石慎三郎先生によると、「大開発の時代」とのことです（大石慎三郎（1977）『江戸時代』中公新書）。例えば、江戸時代初期（1603年）と享保改革期（1716年～1736年）を比較すると良くわかります。【資料1】（本書3頁参照）をご覧ください。推計にはなりますが、人口でみると江戸時代初期には1,000万人だったものが、享保改革期には3,000万人を超えています。3,000万人と

いう数字は、当時のイギリスやアメリカの人口よりもはるかに多い数字です。100年間で人口が3倍となるのは、社会的にどのような大きな変革があったかは想像を絶します。また、耕地面積も増えています。山を削り、河川を改修し、荒地を耕すことで、耕地面積は206万町歩から、約1.5倍の297万町歩に増えています。そのような、生産力の増大の背景には、人間の交流がより盛んになったことがあげられます。従来は、血縁や地縁といった、狭い村や町の中の縁が主だったのに対し、100年経つとネットワーク社会になります。契約書・為替・手紙といった文書の普及による、ある種現代のネットワーク社会におけるメールやスマートフォンの普及に似た大きな変化があったのではないのでしょうか。これは、それまでもみられた法令や行政文書、契約書といった文書による通信がさらに増えることとなりました。このような変化は、教育に支えられ教育に返っていくこととなりました。そのため、「大開発の時代」は教育の大きな進歩の時代でもありました。

ところで、江戸時代の教育というと、寺子屋をイメージされる方が多くいらっしゃいます。実際には寺子屋だけでなく、私塾や藩校、お稽古屋といったものもありましたが、寺子屋が有名です。ただ、寺子屋も、手習い塾だと言いつつ塾中に含みこまれます。これは現代の学校とは違い、入門は随時で、教育内容も一人ひとりに個別化された教育が行われていて、実用本位の教育であり退屈しなかったと思います。識字率についても、推計であり、諸説ありますが、19世紀中葉で男子が4割～5割、女子でも1割～2割と言われています。また、識字率は農村よりは町の方が高く、女性も多くが字を読めたのではないかと思います。この識字率は、当時の欧米よりも高い数字です。水戸市が発行されている報告書にも紹介されていますが、欧米から訪日した外国人の記録もあります。

例えば、室町時代には、イタリア人のヴァリニャーノが訪れており、次のような言葉を残しています。「きわめて儀礼的な言葉をもって話し合い、(中略) 相互に敬意を失うことがない。(中略) ことごとく日本人がまるで同の学校で教育を受けたかのように見受けられる。」(松田毅一他訳『日本巡察記』平凡社、1973年)。

また、江戸時代にはオランダ人のカロンが来日しており、日本人の筆記能力に関心を持っており次の

ような言葉を残しています。

「彼らは特に準備せられたペン(筆)を以て書く。彼らの命令は大概手紙によるが、これは迅速に到着し、遅延しないからである。(中略) 多くの事実を数行に書くことは一つの技術で(中略) 彼らの請求書・書類・手紙・殊に高位長上に宛てた文が、短文で内容に富んでいるのは驚くべき(中略)。勘定は正確で、売買を記帳し、一切が整然として明白である。」(幸田成友訳著『日本大王国志』東洋文庫、平凡社、1967年)。

時間はあくまでも、幕末にはアメリカのマクドナルドが、来日しており、「日本人のすべての人—最上層から最下層まであらゆる階級の男、女、子供—は、紙と筆と墨を携帯しているか、肌身離さずもっている。すべての人が読み書きの教育をうけている。(中略) また、下級階級の人びとさえも書く習慣があり、手紙による意思伝達は、わが国におけるよりも広く行われている。」(『マクドナルド「日本回想記」』村上直次郎編・富田虎男訳、刀水書房、1981年)と記録を残しています。

最後になりますが、ロシアのベルクは絵にも着目しており、

「絵による表現への好みは一般的であって、ほとんどすべての日本人が絵を描くらしい。字を書くにも手と目の修練がいるが、単に書くだけでなく、美しく書くことが要求されるので、子供のときから時間をかけて入念にやるのである(中略) どこの本屋へ行っても、絵図入りの書物は無数に見出すことができるし、また何百という絵だけの本もあるのである。」(中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記』上、新異国叢書、雄松堂書店、1969年)との記録を残しています。

日本人の学識・教養ということで短くまとめますと、「礼儀・秩序、紙・文書・勘定、教育の普及、芸術の愛好」といったキーワードが、訪日外国人の観察から浮かび上がってきます。

次に、こちらは江戸時代の庶民の話になりますが、手習い塾や三味線塾に通う女の子の話をさせていただきたいと思います。簡単に言いますと、お稽古事を夕方までにたくさんこなす、という話です。様々な文献でも引用されている、式亭三馬の『浮世風呂』という小説でして、次のような一節が書かれています。

「まあお聴な。朝むつくり起ると手習のお師さんへ行ってお座を出して来て。夫から三味線のお師さん

の所へ朝稽古にまゐってね。内へ帰って朝飯をたべ
て踊の稽古からお手習へ廻って。お八つに下ってか
ら湯へ行って参ると。直にお琴の御師匠さんへ行て。
夫から帰って三味線や踊りのおさらひさ。其内にち
イッとばかりあすんでね。日が暮ると又琴のおさら
ひさ。夫だからさっぱり遊ぶ隙がないから否で否で
ならないハな。」(式亭三馬「浮世風呂」(女湯、三
編上ノ一)、1811年、早稲田大学付属図書館所蔵)。
これは、一人の女の子がお風呂入りながら、もう
一人の女の子に日々のお稽古事について話している
場面です。話している女の子は嫌がっている素振り
を見せていますが、本当に嫌なのか、それとも自慢
しているのかは分かりませんが、日々の生活で退屈
している印象はありません。当時の庶民のうちにも、
ここに描かれているように、様々な塾へ通って学ん
でいた子どもがいたようです。

当時の人々の多くが塾や習いごとに通っていた証
拠となる書物があります。1860年に刊行された、
『安政文雅人名録』という、13センチ×18センチ、
70余丁ほどの人名録です。この人名録が当時印刷
されて売られていたと思われます。現在でも古書店
やネットなどで売られており、私も一冊購入しまし
た。

この本は、【資料2】(本書3頁参照)に示してい
ます通り、縦行に人物が一人ずつ記載されており、
全部で901人の名前が載っています。一人一人の
情報を見ますと、「逸齋」「宥齋」「一浦」などと、
いろは順の号で名前が並んでいます。号の他の名も
本名や字が書かれ、住所などが書かれています。他
にも、「在宿」という項目はいつならば在宅か、つ
まり二と七の日とか五や十の日とか、または午後
は家にいるとかいうことです。上の右肩に小さく「儒」、
「儒書」、「儒算」、「画」などと書いていますが、
これはその講師が教えている内容です。「儒書」と
儒学と書道とか、「儒算」と儒学と算術です。
この人名録には、本当に豊かな情報が載っています。
次の資料は当時の江戸の絵図です。現在の山手線
の丸い線路を重ねてみると、丸いと言っても縦長な
のですが、主にこの上側半分の丸の内に、塾や習いご
とが多くあったことが分かります。

学生さん相手の講義だと、よく尋ねるのですが、
「師匠901人の中で、何を教えている人が一番多い
でしょうか」と尋ねます。多くの学生が、儒学が一
番多いのではないかと手を挙げますが、不正解。こ
の本では「儒」学は901人中95人となっており、

一番ではありません。一番多いのは「画」の画学で
して、絵の方が需要があるということでしょうか。
このような人名録が印刷され、現在にも残っており、
購入することができるくらい、多く流通していたわ
けです。

とても長くになりましたが、ここまでが前置きと
なります。江戸時代の人々が習い事を楽しんでいた
ことが分かると思います。

2 「塾」ということば

次に「塾」ということばの話に入っていきます。
「塾」という言葉を広漢和辞典で調べてみますと、
この字は、「しゅく」や「じゅく」と読みます。意
味としては3つあり、1つ目は、「もんべや。門の
両わきにある室」という意味を、2つ目は転じて、「ま
なびや。学舎。昔、門側の塾で家の子弟を教えたこ
とに基づく」という意味を、3つ目はここではあまり
関係ありませんが、「まと。準的」という意味があ
ります。解字としては、形声文字で、土+孰声。「孰
は、よく煮るの意。旧時代に門のかたわらなどで児
童にものを熟知させるために設けられた私設の教場
の意を表す。」とのことでした。

申すまでもなく、今日の講演会では、2つ目の意
味が当てはまります。手習いの塾を除く、学問塾(い
わゆる私塾)の総数は何千もあると考えられていま
す。次の【資料4】(本書4頁参照)では茨城県外
の塾で今日でも有名な塾を挙げさせていただいて
います。塾名を見ていただくと、必ずしも「~塾」と
していないことが分かります。ここでは、荻生徂徠
の菴園塾(東京)や吉田松陰の松下村塾(山口)は「塾」
が付きませんが、必ずしも「~塾」となっていないこ
とが分かります。

3 塾の歴史

では次に、ざらっとですが、塾の歴史についてみ
ていきましょう。はじめに、皆さんに質問をします
が、【資料3】(本書4頁参照)はなにを表している
でしょうか。一番上が蒲校、真ん中が私塾(学問塾)、
一番下が手習い塾となっています。・・・・・・(間を
取る)。この見方としては、上下をひっくり返して
見ても良いと思います。この質問をしますと、よく
ある回答として、下から上に向かって、下等な教育
機関から高等な教育機関になっているとの意見がで

ます。はい。そのようにも見えますが、ここで私が申し上げたいのは、次の資料の通り、存続期間とそれぞれの数を表しています。この数字は江戸時代の学校について、明治時代になってから文部省で数えられたものです。実際には、もっとあったのではないとも言われています。寺子屋（手習い塾）についても、実は5～6万はあったともそれ以上あったとも言われています。私塾についても、同様にもっとあったと考えられます。

時期についても、ご覧の通り私塾は藩校よりも昔からありました。私塾はそもそも、藩校の基礎となっている例もあります。

例えば、お手元の資料にあるように茨城県内では、お隣の笠間市で秋元渡郊の私塾を藩校とした時習館があります。また、同じ関東地方ですと、少し遠くありますが、埼玉県さいたま市の児玉南柯の私塾が岩槻藩の藩校である遷喬館となっています。

言ってみれば、藩校というのは公設の学校ですが、中身は時に民営となっていたようです。もともと私塾であったものが取り込まれた公設民営の藩校が江戸時代には少なからずありました。

その最たるものが、私が修士論文と博士論文で書かせていただいた、昌平坂学問所です。昌平坂学問所は、もともと林家の私塾としてあったものを、寛政年間に幕府の学問所としたものです。幕府の学問所になった後にも大きく整備していますが、林家の私塾の頃から幕府の援助を得ていて学舎や聖堂があり、ほぼ寛政以後の配置にはなっていました。

【資料5】(本書4頁参照)をご覧ください。点線が林家の塾の部分を表しました。1630年に林羅山が上野の忍岡に塾を開いたことから始まり、そのほかに、現在の街中にも塾があったといわれています。その後、1689年に4代将軍徳川綱吉の肝いりで湯島に移り、それが1797年に昌平坂学問所として幕府の学校になりました。また、図の一番下に、林家本宅となっている部分がありますが、これは現在の東京駅の近くの八代洲に林家の本宅があり、そこでも塾活動をしていたことを表しています。門人帳(入門簿)の「升堂記」を見ると当時の様子が分かります。学問所としては100年ほどで明治時代を迎えますが、林家の私塾としては1600年代に始まって明治以降も静岡や前橋に移転して存続していました。

林家塾の仕組みがかなり昌平坂学問所に引き継がれていることは、当時の林家塾の日記と昌平坂学問所日記の比較からも分かります。【資料5】(本

書4頁参照)に載せております。林家時代の寛政5(1793)年「昌平日記」をご覧ください。右側の丁には「講釈」や「釈菜」のことが見えますし、左側の丁には「講釈」や「素説」があったことが書かれています。昌平坂学問所になっても同じように日記をつけており、壬戌日録18日の部分をみれば「釈奠」の記録が見えます。日記も行事も私塾の活動を模倣したものです。私塾は藩校の母ではないかと言えると思います。

4 塾の多様化

次に、塾の多様化について話をさせていただきます。ここでは、私塾での学問としてどのようなことをしていたのかということについてお話をさせていただきます。

私自身は私塾で学んだ経験はありませんが、広島大学に通っていた時に、漢学の先生にお世話になったことがありました。その先生は、広島高等師範学校の教授をされていた河野辰三先生という方です。私の大学の先輩にあたる香川正弘先生と言われる後に上智大学の先生になられた方から河野先生をご紹介頂きましたが、河野先生は、東京帝国大学の支那哲学科を卒業され、儒学の研究をされていました。河野先生には毎月1回、大学院の先輩や仲間数名とともに論語の講読の稽古をつけていただきました。先生から最初に教わったことは、「學事説文」というものです。これは、「學」という字にどのような意味があるのかということを教わりました。「學」という字は、下の部分に、「子」という漢字があることは皆さんも一目見て分かると思います。「子」の上に、布の覆いがかかっていますが、これを漢字の用語で「ベキ」と言います。さらに、その上に、手の恰好している2つの部分を「キョク」と言います。このように「ヒョイ」と、手で覆いを持ち上げることで子どもは覆いが取れ、物事がよく見えるようになるわけです。これを、「学び」と言います。大事なのはパッテンの部分です。これは、「交わる」という意味を持っており、教える側や教わる側、そして教材が「かちつと交わる」ということを表します。この部分が交わらないと、「学ぶ」という活動は発生しないわけです。河野先生はそのような説明から授業に入っていました。

授業では、儒学の基本となる、「論語」について教えていただきました。私は論語を先生の授業で初

めて読みました。論語の内容自体は簡単ですが、逆に簡単すぎて、初めは内容がよく分かりませんでした。その様な中で、論語における、「学」という字がどのように使われているか調べてみました。「論語」における「学」の用例としてつぎのようなものがあります。

学んで思わざれば 則ち罔し 思うて学ばざれば 則ち殆し

「学」という字は、真似をするということを示す、「思ふ」という字は、考えるということを示しています。この文章では、「真似をするばかりで、自分で物事を考えなければ物事に暗くなり、逆に考えてばかりで、人から学ばないことも危険である。」と言っており、現在にも通用する話です。こういった話を河野先生から毎回の授業の中で話をさせていただき、私どもも様々な文章を読んで、自身の考えを話させていただきました。これが月一回の塾活動でした。

ここで、論語の話は横に置きますが、先ほど見ましたように漢学塾のほかにも国学塾や洋学塾もありました。しかし、国学塾も洋学塾も基本は漢学であり、まずは漢学を学び、文章を読む力や考える力をつけました。

他にも変わった名の学問として、心学というものがあります。これは、道徳教育に近いものです。資料を見ると男女席は区別されていますが、たくさんの子どもが話を聞きに来ている様子がわかります。ここで話をしている道話の伝道師は、話を面白くするためのネタ集めに必死でした。そこから現在の落語に話が繋がっていきます。またこれは、お寺の和尚さんが、檀家の方にお話をする際、退屈させないように話を面白くすることも同じです。このような石門心学も塾の一つに入ると思えます。

次の【資料6】(本書5頁参照)は、関西大学の吾妻重二先生による「泊園書院と関西大学」(『関西大学年史紀要』20, 2011年)という論文の中に記載されているものです。泊園書院は関西大学と縁のある塾で、大阪に在所しており、明治時代まで存続しました。この泊園書院は全国から塾生を集めており、左上が江戸時代の、右下が明治時代になっての分布図です。都道府県によっては500人以上の塾生が泊園書院で学んでいるところもあります。分布図を見ると、茨城県でも1人学んでいる方がいるのがわかります。

先の高橋市長のごあいさつでも、泊園書院の他に、大分県日田市の咸宜園が多く地域から塾生を集めていたとお話がありました。そして日新塾でも、加倉井砂山は20代にして教師となり、延べ1,000人もの塾生を集めたとの話もありました。このように門人を広い地域から集めた私塾が当時は少なからずありました。

中には変わった塾もありました。ここで、当時江戸の市中で学んでいた、三島政義という旗本の学習歴を見てみましょう。当時、三島は江戸幕府が実施していた学力コンテストのような学問吟味を2回受験しており、その直前には様々な場所で学んでいたことがこの資料から見て取れます。1856年の部分を拡大しますと、1月には水上鑑太郎方で中庸論講をしており、2月2日には永井兌次郎方で書経論講を、2月22日には史記会を、2月25日には昌平坂学問所でも学んでいます。他にも、板橋邸で勉強会を行っていた、といったことが分かります。こうした勉強会すらも、継続していれば、塾として歴史に残ったものと思われれます。

日新塾などのように大きな塾もありましたが、皆さんは、私塾というと「小さい」というイメージをお持ちではないでしょうか。事実、一般的には小さな塾が多いのですが、小さな私塾や寺子屋といえども、授業方法や使う書籍、その他様々な要素で全国的に繋がっていたといえます。例えば授業方法で言うと、「講釈」という授業法があります。資料のように、昌平坂学問所での講釈の様子を描いたこの絵では誰もノート取っていませんが、そのような、聴くだけのスタイルがありました。また、書籍としては、代表的な教材に儒学の「四書五経」があげられますし、解説書としての集注本も行き渡っていました。このように、授業方法や全国共通の書籍による教育が行っており、全国の藩校や私塾、学問所などが繋がっていました。

より根本的には、公文書で使う標準的な書体や文書作成方法でも全国が繋がっていました。例えば、書体では「御家流」または「青蓮院流」という流儀がありました。辞書を引くと「御家流」には2つの意味があり、一つ目は、「身分の高い家において伝承される流儀、あるいは藩における公式の流儀のこと」と書かれています。二つ目は、「書道においては、おもに武家の公式文書に使われた尊円流の流れを指す。」というものです。御家流は、資料でお示したように、板を掘って作られた版本の往来物でもた

いてい使われました。

5 世界遺産とは

こうして全国的につながっている学校遺産について、現在、茨城県水戸市、栃木県足利市、岡山県備前市、大分県日田市の4市の資産によって、世界遺産登録に向けた取り組みをしておりますので、それについてお話をさせていただきます。

現在、世界中で1,000件を超える世界遺産があります。日本では昨年、「長崎と草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が新たに登録されましたので、現在、全部で文化遺産が18件、自然遺産が4件の資産が世界遺産として登録されています。

世界遺産というのは、世界の人々と、「いいでしょう！」「いいですねえ」と言って、その遺産に関する「顕著な普遍的価値」を全人類で共有し喜び合うのがその趣旨です。皆で「いいね」「希望が持てるね」「美しいね」「楽しいね」などと喜び合うのが世界遺産です。我々は、我々の資産を世界の人々と喜び合えるように紹介できなくてはなりません。現在、「近世日本の教育遺産群」として、それぞれ4市の資産をもとに明確な説明をつくり、世界に売り出すようにしています。

我々が打ち出そうとしている、顕著な普遍的価値は、<人それぞれの主体的な学びの物語>、<身分に関わらず、様々な人が学習できたこと>、<学力の程度によって様々な学習方法が用意されていたこと>、<色んな地方に出かけて色んな勉強ができたこと>などです。実際には様々な垣根もあり、そこまで自由な環境でもなかったことは事実ですが、自分が退屈せず、自分の必要に応じて、実用的な、楽しく美しいものを学べる。そういう用意を私たちは国を挙げて行っていました。

その中には、これまでもお話ししてきました、藩校や私塾、寺子屋、お稽古所といったものがありますが、残念ながら、お稽古ごとを行っていた施設や寺子屋は資産として現存していないため、共に活動してはおりません。我々の協議会は、教育資産の中でも保存状況の比較的良好い4つの資産で世界遺産を目指しています。

我々の資産が、世界の学びの希望になり、どんな人でも主体的な勉強ができるように、また、退屈なやらされる勉強で終わらないようにとのメッセージをこめて、近世日本の塾や学校の世界遺産登録を目

指しています。

4つの資産ですが、まず足利学校は江戸時代より前に設立され、学校の種を作りました。足利学校では「学規三条」という規則を作っており、そのなかで、学習内容を決め、規範を定め、また装いまでも決めました。つまり、当時は戦国時代ですので、戦わない存在だということを示す為にも、剃髪した僧侶の恰好＝僧形をしていたと、五味文彦先生はおっしゃっています。足利学校に対しては、戦国大名たちも陣中に「濫訪停止」、「狼藉停止」のお触れを出し、学校を守るようにしていました。このようにして、足利学校という、平和に学ぶ場が確保されたのです。

足利学校に関わる人々の努力によって、学問の灯が江戸時代に伝えられました。足利学校は、後の教育施設のモデルとしての施設配置をしており、左側に孔子廟を、右側に学校を配置しています。昌平坂学問のように施設によっては、左右が逆になっている場所もありますが、施設やその配置の面からも、これが学校というものなんだということに近世に伝えました。蔵書や学習方法などの面も含め、入江宏先生はこれを「中世から近世へのバトンタッチ」とおっしゃっていました。そのバトンを真っ先に受け取ったのが、岡山県備前市の閑谷学校です。閑谷学校は国宝の講堂を含め、見事な建物群やその美しい環境によって知られ、藩主が領民の教育のために設立したことで有名です。

さらに時を経て、19世紀になりますが、大分県日田市の咸宜園が隆盛を迎えたころには、儒学を中心とした学習文化が花開きます。咸宜園では、月旦表という成績表を毎月掲示する実力主義の刺激的な教育を行っていました。これは、【資料7】(本書5頁参照)のとおり、全国のいくつもの私塾が真似をしました。咸宜園の塾生を受け入れてその勉強生活の基盤を提供した豆田町も、ともに世界遺産登録を目指す資産群を構成しています。

ご当地茨城県水戸市に、弘道館が設立されたのは4つの資産の中でもっとも遅い時期になりますが、総合学園として、いわば諸藩校の<良いとこ取り>をしたと、現在の弘道館の研究員の先生が言われますように、近世の学校の到達点と言える存在です。弘道館の総合学園としての在り方は、その後のいくつもの藩によって真似をされるようになりました。借来園が資産を構成しているのは、狭く学問に凝り固まらないで、楽しみながら勉強するという、そう

した学習観を日本人は育ててきたことを示すためです。

近世の教育遺産の特徴をまとめますと、漢学（儒学）の基盤として、実用性や礼儀、芸術性、娯楽性を大事にし、超身分・超地域のつながりのなかで民間中心の存在であったと言えます。この「民間中心」だったことを今日は特に強調したいと思います。そのようなことが、時代的な制約はありながらも、比較的自由で主体的な学びを導ぶ文化を招来したともいえるでしょう。そのような中で、私塾は大きな役割を果たしました。

おわりに

最後に、塾という空間、塾という場所についての特徴を整理して、この講演のまとめをさせていただきます。まず1つ目として、民間中心で近世日本の教育の大きな部分を担ったのが「塾」です。2つ目として、興味関心・実用のための個人のニーズに即応した学びを重視しました。3つ目として、自然環

境や身体性、芸術性を導ぶ全人的な学びをもたらしました。4つ目として、文字や儒学や算術などの教育内容面の共通性が全国的に普遍性の高い学びをもたらしました。5つ目として、人の移動や物・教材・図書・教授法の伝播などの「業界」ネットワークを成立させていました。6つ目として教育の在り方として、平和な環境や師弟間の愛と規律のある礼儀を広めました。

塾の研究は、皆さんも参加されて、まだまだ開拓されなければならない分野です。「どんな勉強をしていたのか。」「どんな建物で学んでいたか。」「どんな本を読んでいたか。」「どんなモノに囲まれていたか。」「掘ったら、何が出るか」ということや、「教師や弟子がどう動いていたか」ということを、わずかずつであっても持ち寄って、「塾という空間」について、より一層深く解明しなければならないと思います。

私の話は以上とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

日新塾関係の指定文化財

加倉井砂山夫妻の墓

所在地：水戸市成沢町 1614

管理者：個人

年代等：江戸時代

指定区分：市指定（歴史資料）

指定年月日：平成 25 年 2 月 8 日

説明：加倉井砂山夫妻の墓は、江戸時代後期の教育者、加倉井砂山とその妻宇良子（うらこ）の墓です。砂山が主宰していた私塾・日新塾では、習字や読書・作文などの学芸だけでなく、剣術や馬術、軍事訓練などの武芸や医学など幅広い教育が行われました。日新塾へは、水戸藩領内だけでなく、全国から入門者が集まり、藤田小四郎や川崎八右衛門など多彩な門人を輩出しました。

砂山は、安政 2（1855）年に 51 歳で亡くなると、加倉井家代々の墓に妻と共に葬られました。昭和 3 年春に現在の場所へ完全に移転・整備されました。

砂山の墓石には、600 余字に及ぶ加倉井砂山の功績が刻まれており、加倉井砂山の人物像や、当時の私塾の状況を現在につたえる歴史資料として貴重なものです。



基調講演2 「加倉井砂山と日新塾の教育」

鈴木 暎一氏（茨城大学名誉教授）

(1)

只今ご紹介いただきました鈴木です。私は「加倉井砂山と日新塾の教育」という題でお話させていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

最初から個人的な思い出になって恐縮ですが、私の父の実家は旧穴戸町、今の笠間市大田町というところ。水戸線の穴戸駅の近くですが、私の一家は太平洋戦争の末期、水戸市街が空襲にあう8月2日の直前、7月末に水戸市東台から父の実家つまり父の兄、私にとっては伯父の家の離れに疎開しました。

私は終戦直後、小学校一年生の二学期から高校一年までその穴戸の家の離れに住んでいたのですが、伯父の家には砂山の肖像画が伝えられていました。小学校低学年の頃から「これは砂山先生の肖像画だ」と聞かされていたものの、もちろん当時は「砂山先生」とはどんな人物か詳しく知ろうとせせず、ただ鈴木家の先祖が教えを受けた偉い先生だ、ということくらいは、父から教えられたのか、何となく頭に入っていました。

今、私の右側の白板に掲示されているのがその肖像画です。今回この講演会のために、実家に伝えられている肖像画を、父の実家つまり本家に住んでいる従兄に頼んで写真に撮ってもらいました。従兄は親切にも原物の掛け軸を持って行って会場で見ただいてほしいと言ってくれたのですが、歴史文化財課ではもしも誤って何か傷でもつけたら大変なので写真で十分、とのことだったので、写真を送ってもらった次第です。

高校二年生になる時、父の勤務の関係で私の一家は日立市に住むことになり、その後はしばらく砂山のことは一家の話題にものぼらなくなりましたが、やがて昭和34（1959）年には『水戸市史』上巻の編纂事業が始まり、それから2、3年後には中巻のための、江戸時代の水戸地方ないし水戸藩地域の調査・研究も行われるようになりました。その中巻(三)の目次には「土民の向学と文化の普及」という項目があり、主幹の伊東多三郎先生のご指示で、藩校である弘道館や水戸城下の私塾についてばかりでなく、日新塾など農村の私塾も私が担当することに



鈴木暎一氏講演風景

りました。

そこであつての記憶がよみがえり、まことに不思議な縁だ、とその時思いました。と申しまでも、調査や原稿の執筆をしたのは今からもう40数年も以前、私が30代前半のことですから、ずいぶん昔の話です。もちろんその時分、成沢町の跡地にも何度か足を運び、市史編纂室の方々とともに家屋敷の測量など実地調査をしました。その時の図面が資料③（本書11頁参照）です。日付を見ると昭和48（1973）年9月26日とあります。図面にみる母屋は、明治10（1877）年に火災で焼失したあとに建てられたもの、その母屋と廊下で接続している離れは江戸時代の建物で、近くの本家から移築したものとのことです。このあたりの説明はあとで関口さんから詳しくお話があると思いますので、今は省略させていただきます。

ところで、私が日新塾の調査を進める上でほとんど唯一の導きの書物となったのは、ここに持ってきました、この弓野国^{ゆきのくに}之介氏の著作『加倉井砂山』です。これは大正11（1922）年の発刊ですが、今後もこれ以上の研究は不可能だろうと思います。

砂山の自宅と塾舎は、今申し上げましたように、明治10年の火災で西側の別棟の板倉などを除き主要な建物はみな焼けてしまっ、そこにあったであろう資料は烏有に帰してしまっからです。弓野さんはそれでもわずかに残った史料を丹



弓野国之介著『加倉井砂山』

念に集め、また存命中の門人たちからも聞き取り調査などを行ってまとめたわけですが、この書物は、大正10(1921)年に当時の『いはらき』新聞に77回にわたって連載した記事がもとになっているのです。したがって、私が調査したといっても、そこで役立ったのは、加倉井砂山の家のものではなく、あとで詳しくお話するその門人である興野介九郎の子孫の家に残されていた史料などが主なもののです。ですから、これからお話することは、弓野氏の著作によるところが多く、私が付け加えることができた部分は少ししかないということをお知らせしてお断りしておかなくてはなりません。

(2)

では、そのことを確認した上で、これからお配りしてある講演要旨をご覧くださいながら、お話を進めることにいたしますが、その前に砂山の時代の社会環境といえますか、日新塾の時代背景といったことについて少しばかり触れておきたいと思えます。

江戸時代中期以降になると「教育爆発の時代」といわれるくらい全国どこ地方にも私塾や寺子屋が続々と出現し、一方藩の学校すなわち藩校も次々と建設されるようになります。これを水戸城下の場合についてみると、資料①(本書9頁参照)の表が一つの例となるでしょう。この表から、19世紀はじめの時点で水戸城下には学問・手習い塾が42、武芸塾が142も存在していたことがわかります。これは茨城県立歴史館所蔵の弘道館関係史料のなかの一つ、「武芸上覧御用留」から採ったものですが、この史料の性格から見てここに表示されている私塾は藩公認のものともよいと思います。士民の子弟はだいたい6・7歳になると一つの手習い塾と2つの武芸塾に通うことが多かったようです。もちろん城下在住の士民の子弟ばかりか近郷農村の子弟の入塾する例は多くありました。

資料②(本書10頁参照)は、時期が30年ほど下った天保10(1839)年10月の時点のもので青山延子(号は拙斎。初代の弘道館の教授頭取を務めた当時の水戸藩の学者の代表的人物の一人。)の私塾に通う子弟の似顔絵の一部で、そこに描かれている入門者は総勢91人です。延子の次男延昌は画家でしたので、父親の塾に通う子弟の一人一人の顔を写生して「青門肖像」と題して残してくれたわけです。原本は市立博物館にあります。その模写本が

弘道館にあり、これは公開されています。

この青山塾は城下の私塾中では当時最大規模だったように思います。1段目の左、後藤玄之介と2段目の真ん中、岡本三郎の顔にはテンテンのような傷が見えますね。これはアバタです。天然痘は幸に治ってもアバタが残るわけですから、いかに恐ろしい病気だったかが分かります。罹率率は女子も同じでしょうからなおさらです。

ちょっと余談になりましたが、水戸城外の原石川村の郡司藤次衛門の私塾は東窓舎といい、ここには30人くらいの入門者がいたようです。

こうして私塾には、そして今は触れませんが寺子屋には、「教育爆発の時代」の中で、自発的に学びにくる入門者が多数いたわけて、日新塾についてもそのような時代環境とともに考えてみなければなりません。

(3)

それでは講演要旨①(本書6頁参照)をご覧ください。日新塾は、文化2(1805)年に生まれ、安政2(1855)年に亡くなった加倉井砂山が茨城県成沢村西坪(水戸市成沢町)の自宅に開いた塾です。砂山は51歳で亡くなりましたが、その門人数、設備、教科目などからみて、水戸藩最大の私塾であることはもちろん北関東随一といってもよいのではないでしょう。

砂山は諱(本名)は久雍のち雍、字は立脚、通称は淡路、砂山のほか西軒、頼軒、不知老斎などの号がありました。父は久泰といい、砂山はその次男です。兄久継が文政3(1820)年、27歳の若さで亡くなったので、父の強い意向により当時16歳、11歳年下の弟である砂山が家督を継ぐことになりました。少年時代の砂山は、同村同族の加倉井忠珍(号は松山)という人に学び、その影響で早くから江戸に出て勉学したいという希望を持っていたのですが、はからずも家督を継ぐことになったので、江戸行きは断念せざるを得なくなったといわれています。忠珍は、まず水戸城下の碩儒立原翠軒に学び、そのあと江戸に出て折衷学派の儒者山本北山・亀田鵬斎に学んで将来を嘱望されながらも病を得てむなしく帰郷していた人物です。その忠珍に学ぶうち砂山も江戸へのおこがれを持ちそこで本格的に学問をしようとしたので、その影響で早くから江戸に出ていた父は、出府を断念させるため早めに家督を譲ることにしたのだ、と言われています。

ところで、加倉井家は代々成沢村の庄屋を務めてきたこの地方の素封家・名望家で、祖父の久徴の代にはさらに五十石の石取りの郷土、つまり農村に住みながら武士の待遇を与えられる家柄となり、父久泰はこの役職を引き継ぎながら、西坪の現在地に自宅を新築しました。実は、父久泰は村の行政を司る傍ら、自宅に私塾を開いていて、2、30人の子弟の教育にも携わっていたので、砂山はこの父を助けて早くも家督を継いだ16歳ころから子弟の面倒もみることになり、20歳頃になると父に代わって塾運営に責任をもつ立場に立ったようです。

それから間もなくの文政9(1826)年、砂山22歳のとき、屋敷の正門に向かっての右側に三楽楼という三間に五間の二階建ての塾舎を新築します。門人が増加し、母屋だけでは収容しきれなくなったので、従来は母屋の二階が門人たちの居室だったのですが、そこだけでは足りなくなったわけです。

当時彰考館(『大日本史』の編纂局)の総歳代役の職にあり、有名な『新論』を執筆したばかりの会沢正志斎は日新塾を訪れ、三楽楼の新築を祝って、「君子有三楽」の五文字を揮毫してくれました。これは中国の古典『孟子』にある言葉です。君子(学徳のある立派な人)には三つの楽しみがあるということ、ちなみに父母兄弟みな無事であること、公明正大で心に恥じることのないこと、そして天下の英才を得てこれを教育すること、この三つが「三楽」です。

砂山は、天保10(1839)年全隈村の庄屋も兼ね(この年に父は79歳で亡くなりました)、同12(1841)年からは近くの五、六ヶ村の庄屋を兼ねる山横目に任せられ、さらに同14(1843)年になると歩行列の格式も与えられました。この年には全隈村庄屋の兼職は辞したようです。

この間、砂山38歳の同13(1842)年、当時の九代藩主徳川齊昭に招かれて借楽園の好文亭落成記念の詩会の宴に出席します。その宴は、齊昭の発案で、借楽園の景観を30数名の招待者たちに思う存分詩会で吟じさせようというものでした。出席者から集めた詩一つ一つに目を通した齊昭は、「淡路の詩がもっともすぐれているではないか」と言うと、齊昭の近くに控えていた、今お話しした会沢正志斎や最初の頃にお話しした青山延子らも「同じ意見でございます」と返答したということです。

こうして砂山の名声が周辺各地に広まると、門人はさらに増え、このため三楽楼とは廊下づ

たいに接する、四間・六間の平屋造りの塾舎を建て、これを有隣館と名付けました。いうまでもなく『論語』の「徳は孤ならず、必ず隣有り」から採ってきた言葉ですね。

砂山25歳のときの入門者の一人に先にお話した興野介九郎という人がいます。字を道甫、号を槐庵と称した興野は、茨城郡高久村(今の城里町)祖頭の加藤木信衛門の長男。12歳で砂山に入門、21歳のとき興野介右衛門の養子となり、やがて初代の塾長に指名されました。砂山門下の一歩弟子ともいえる人物で、砂山の墓碑銘を執筆したのもこの興野です。その墓碑銘の草稿中に「三楽楼、不知老斎、行伍塾、万甫楼、有隣館、日新舎、皆書斎名也」という文言がみえます。これは興野家所蔵文書の一つです。墓碑銘にはこの文言は削除されているのですが、この書き方から推測すると、「日新塾」という決った名称は当時なかったのではないのでしょうか。いくつかの塾舎の一つに「日新舎」があつて、それがいつしか、おそらく明治時代になってから「日新塾」という名称として、人々に伝えられていくようになったように考えられます。申しおくれた感はありますが、ここで「日新」という言葉についてちょっとご説明したいと思います。「日新」は、中国の古典の、いわゆる四書の一つ『大学』と、いわゆる五経の一つ『易経』にある言葉です。このうち『大学』には、「湯の盤の銘に曰く、『苟に日に新たり、日に日に新たにして、又日に新たにす。』とみえます。つまり人間はたゆまず勉学を続けて日々成長していかなければならないということだと思います。興野介九郎についてはまたあとでもお話をすることがあるでしょう。

さて、砂山は先程申し上げたように20歳頃から塾の実質的な責任者となったので、教育者としては51歳で亡くなるまで30年余り活動したことになるわけですが、その門人の総数はいったいどれくらいあったのでしょうか。砂山晩年のことと思いますが、砂山と、門弟の森田清明という人物と興野介九郎の3名で詠んだ聯句の中で、森田は「子弟三千各長苗」と詠じ、一方興野は師の墓碑銘の中で「その子弟を教育するに、循々として倦まず、学に従う者頗る多し(原漢文)」と書いています。

かつて弓野氏の調査で明らかになった塾日記の断簡によれば、門人の数は講演要旨②(本書7頁参照)に記載している4のようになります。弓野氏は、その年代は不明としていましたが、日記の内容をよ

く読んでみると、その四葉のうち二葉については嘉永元（1848）年と同3（1850）年であることがわかりますので、その年代を書き入れておきました。それぞれの時点でもっとも多かった日は102人でもっとも少なかった日は60人です。在塾者は毎日小刻みに増減していることがわかります。

近郷二里半くらいまでは通学範囲で、それより遠方で通学できない距離の入門者は寄宿するわけですが、その人数は通常3、40人くらいかと推測され、その中には下野の真岡、高根沢、結城、奥州の白河、会津、さらに越後から笈を負うて学びに来る者さえいたのです。嘉永元（1848）年8月と判断できる先の断簡をみると偏中の小谷龍藏なる人物がその10日から12日まで滞在、小谷の去った12日にはまた江戸、大阪、京都、広島青年8人來訪の記事もみえます。彼らはおそらく水戸遊学中の者で、城下より二里半ほどのところに加倉井砂山ありと聞き、わざわざ成沢の地まで足を伸ばしたのであらうと思います。おそらく会沢正志斎たちの紹介があったのではないのでしょうか。

砂山はこうして塾生教育に力を注ぐかわら、成沢村に「茶話塾講」という会をつくり、折にふれて近郷の老若男女に啓蒙的な話をするこゝもあつたといひます。

こうした状況から推察しますと、「子弟三千」は、「白髮三千丈」のように漢詩特有のオーバーな表現としても、三十年余の期間を考えると、少なく見積もってもその門弟総数は千人を超えていたのではないのでしょうか。

(4)

次には、砂山の教育方針についてみましょう。講演要旨②（本書7頁参照）には①個性の尊重、②時代の進運に即応する教育、という二点をあげておきました。①については、興野の書いた墓碑銘の「学に常師なく、交遊すること最も広く、その子弟を教育するに循々として倦まず、従学するもの頗る多く、各々その性に從いて授く、故に皆その材を達す」という言葉がそれを簡潔に物語っていると思いますし、②については、砂山が晩年に蘭学を学ぶためオランダ文字を習い始めたという次の文章は、師匠自らの率先垂範ぶりをよく示していると思います。

おのか唐学のみおや加倉井淡路のきみハ、歌よむわさハさらなり、五十とせはかりのをり、蘭学し玉ひ、

いとまのみをりにハ、和蘭字うつし学び玉ひけるに、とみにみ病ひにてみまかり玉へるゆ系にえとけたまハすなん

これは興野介九郎（道甫）の「道志留倍」という著作の一節ですが、砂山は亡くなる直前まで蘭学を学ぼうとしていたわけですが、日新精神を文字通り実践していた証拠ですね。砂山はまた天保14（1843）年、39歳のときに齊昭に従って江戸へ出ることがあったのですが、その折高島秋帆の高島流砲術を修め、これを成沢の地で早速実地に行ったといわれています。

さらにもう一つ資料を読んでみましょう。「道甫、袴塚翁の紹介で入門」というところです。これは、興野の少年時代、入門した頃の思い出なのですが、砂山の教育者としての人柄や面影を知ることのできる絶好の文章だと思い用意しました。

初て文選はかく、大学はかく、といふことををしへられたり、いとというれしき事になん・・・このころハ故郷の実家殊に窮たるときにて麦米ハ勿論なへてのくひもの都てとほし、大勢の子供にていかにもくらしかねたり、孝経一卷かひもとめたくおもひけれとも、それをむむる力なくてなん、孝経の価ハ百四十位なるへきに、あはれるるさまなり、油もははしたへて、寒中夜着となんいへるものをきて庭にいててふみよみたりき、加倉井先生ハもちろん袴塚翁にもとの暮にハそれぞれ謝礼をもちへき事侍れと一文もなければ抱なくて汗となかき、先生ハいとふとき人にて、『礼記』の「貧者不以賤」といへるをひき玉ひて仰られたる事ありき、そのうれしさいまに忘草のいかに忘れ侍るへき、おのれふみこのめるをめてたまひて、とまりなハこのふみをしへたまふへしと被仰き

これは、興野の、修学の履歷を述べている無題の小冊子の中にある文章です。文中の袴塚翁は興野を砂山に紹介した、近くの増井村の庄屋袴塚重衛門という人ではないかと思ひます。それはともかく、興野の熱い向学心とともに砂山への尊敬と感謝の念が生き生きと描写されていて心に響く文章ですね。ちなみに『孝経』一卷百四十文くらいというのは、一文は今の金にしておよそ20円から25円ほどと考えられますから、2,800円か3,000円というところでしょうか。「貧者は賤を以てせず」とは、

貧しい者は師匠に金品など贈らなくてもよしい、という意味です。

次に教育科目に移ります。学芸方面では、**講演要旨③**（本書8頁参照）にありますように、読書、習字、作詩・作文、歴史、地理、窮理、兵学のほか時事問題を話題にしての講義、塾生同士の輪講・輪読、そして討論会などがあり、武芸では剣術、砲術、馬術、教練の各科がありました。砂山はまた医学に深い関心があって、書庫には多数の医書を所蔵し、医者への研修にも多大の便宜を与えていたのです。今、茨城県立歴史館には、624部、1,824冊の加倉井家の旧蔵書が保管されています。これは先程触れたように屋敷の西側に独立した板倉一棟があって、ここは風向きからでしょうか幸いにも焼け残って無事だったのですが、その旧蔵書の多くは医書です。冒頭お話しした私の先祖というのは、高祖父に当る鈴木庵庵という穴戸藩の医者なのですが、11歳で入塾し寄宿しながら医学の基礎を文献で学び、在塾五年、その後江戸へ行って実地の修業をしたわけです。砂山は医者ではありませんが、このようなかたちで医者の勉学の手助けをしてくれたので、庵庵以外にも医者の門人は少なくなかったようです。

なお、教材として使われていた文献をみますと、初学者には各種の往来物、『実語教』などで、中級者には四書・五経に『平家物語』や『太平記』などを交え、上級者には『史記』、『資治通鑑』や宋代儒者の著作、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』、『古今和歌集』などだったといえます。

もっとも砂山自身は、これらについて網羅的に教えたのではなく、各書の要点、たとえば『大学』でいけば三綱領・八条目、『孟子』でいえば性善説のようなところを解説し、それ以外は塾生の輪講・輪読あるいは自主研修にまかせる、といった具合だったようです。

また、学んだ兵学の理論を実地に試みるため、時には十萬原（今の水戸市藤井町）、徳化原（今の城里町北方）にまで長距離遠征したりしています。鉄砲の稽古は月の五のつく日と定めており、塾の北側には射的場があって的となる土塁は私の調査した時には長さ25メートル、幅2メートル、高さ60センチという規模で、資料③（本書11頁参照）の現地配置図でご覧のように、まだ残っていました。

剣術は神道無念流で毎朝きびしい稽古が行われ、乗馬用として馬三頭を飼っていて、その世話も寄宿生が当番で担当していたといえます。訓練は月の七

のつく日で、洋式教練に重点が置かれていました。

ここでまた余談になりますが、かつて平成元（1989）年発行の『江戸時代人づくり風土記』（茨城）〈社団法人農山漁村文化協会編〉の「加倉井砂山の日新塾—北関東随一の農村私塾（水戸）」の項の最初のところに私の書いた文章をご紹介しますと思います。

春風が野山をさわやかに吹きわたる日の午後、一人の師匠を先頭に、そのあとを数十人の弟子たちが麦畑の中の道をきちんと列をつくり、いくらか早足で歩いていきます。師匠の顔にはうっすらと汗がにじんでいますし、弟子たちの方は、思い思いにかついで武具が重そうにみえますが、みな頬を赤くそめていかにも一稽古終えたという顔つきです。

畑で農作業に精出していた農民たちは、この師弟の団に気づくと作業の手を休め、師匠に親しみをこめて会釈し、師匠も手を上げてこれに応えています。

この師匠の名は加倉井砂山といい、列をなして帰り道をいくのはその日新塾の生徒たちです。

今日は塾から北方2キロほどの十萬原での野外稽古の日で、稽古を終えて帰るところなのです。時には十萬原より遠い徳化原まで足をのぼして演習することもあります。

今読み上げたこの文章は、私がかうもあろうかと想像して書いたものなのですが、たしかに日新塾では文武共習が大きな特色といえると思います。しかしこのような農村の一私塾で軍事訓練まで行われた例を私は尋ねて知りません。これは先にお話ししたように、砂山が郷土という身分を与えられていたため、藩主斉昭から特別の許可をえていたからできたことなのではないでしょうか。

（5）

好文亭詩会が行われた二年後の弘化元（1844）年5月、砂山40歳の時、藩主斉昭は突然幕府から改革政治のゆきすぎを咎められて致仕し、藩主の地位を退くこととなりました。

この事件を契機に、従来から対立していた、斉昭の政治を支持する改革派と、これに強く反対してきた門閥派との溝はますます深まり、その対立は深刻さを増していきます。

斉昭が処刑されるとまもなく、城下の土民ばかり

か全藩的な規模で農民の間からも改革政治を讃え、斉昭の無実を訴える運動が起こります。一部には江戸まで上って御三家である名古屋藩邸や和歌山藩邸へ押しかけ、陳情する者まで出るほどエスカレートしていきました。

斉昭自身は、論書を下してあまり騒がぬようにと説得を続けましたが取まらず、有力農民の間には入牢者さえ出す事態にもなっていました。

こうした藩内混乱の中、砂山も現状を大いに憂慮するのですが、門人の一人石川忠和の書いた「砂山先生伝」（『砂山詩藁』所収）に、「烈公（斉昭のこと）の冤罪を蒙るに、藩士党を建てて相繼す、・・・藩党正と称し奸と称す、・・・遂にこれを度外視す」とあるように、砂山自身はあえて政治運動には足を踏み入れず、いわば中立的、超越的立場を貫きながら門人教育に専念します。ここで砂山自身の筆跡を皆様にご覧いただくこともかねて、書状の一部のコピーを用意してきました。資料④（本書12頁参照）で、興野家所蔵のもので、書状には月日だけで年号がないのが普通なので、そうすると史料としては使いづらいのですが、この書状は幸いその文面から弘化元（1844）年の8月23日付、興野槐庵（介九郎、道前）宛のものであることがわかります。読んでみましょう。

結大夫も十八日二退職表に相成候由、是二て穩二相成候事と一喜之至御座候、兼而愚論之通、江南登りの義さてさて困候事御座候、真忠節斗も無之、且人物国家安危附托スべきもの掃地申候へハ、是耳苦心事御座候

文面の「結大夫」は家老結城寅寿のことで、結城が用達（執政）を辞職したのは8月18日ですから、これはその5日後に書かれた書状です。「江南登り」とは今お話しした雪冤運動を指しています。砂山は血気にはやって江戸にまで登って示威行動をとるのは、「国家」、この場合には水戸藩のことですが、水戸藩のためにもならない、当今は真に藩の安危をまかせられる人物もいないので、まことに心配だ、と言っているわけです。

その後も砂山の心配をよそに、藩内の対立は激しくなるばかりで、皆さまご存知のように、元治元（1864）年3月、天狗党の挙兵があり、一般に天狗・諸生の乱と呼ばれているような幕末・維新期の、取捨のつかぬ内乱状態におちいっていきます。砂山は

安政2（1855）年に亡くなりますからその激烈な党争を見聞きすることはなかったのですが、門人たちにはこの政争の渦中を生きなければならなかった人も多くいました。講演要旨に書いた、興野道前、光岡多治見、斎藤監物、川崎八右衛門、香川敬三、藤田小四郎、飯田軍蔵、石川忠和などは門人の中でも名の知られた人物です。門人たちの人生航路は種々様々、すこぶる波乱にみちた生涯を送った人も少なくありません。一時期日新塾に起居し、学習を共にした縁故から身分の枠をこえ同志として強い絆で結ばれた者もいました。

藤田、斎藤、飯田のように尊王攘夷思想の洗礼を受けて政治意識にめざめ、現状打破を叫ぶ志士となった者もいれば、石川のように彼らと敵対する立場になった者もいます。一方、川崎のように実業家として地域の発展に貢献した人もいたのです。ここに地方の一私塾の門人群像をみる思いがします。

とは申せ、私は、こうした名の知られた人たちとともに忘れてならないのは、日新塾で学んだ学識・技能をもって地域社会の生活にしっかりと根を下ろして、家業に励み、教育に携わり、砂山の精神を各地に着実に伝えていった人々のことだと思ふのです。今は歴史の中に埋もれてその名を知ることのできない、おそらく優に千人を越すであろうこうした人々の隠れた活動と実践に思いを馳せ、その歴史的意義の重要性について考えてみるべきではないでしょうか。

丁度時間のようなので、これで私の拙い話を終わりにいたします。ご聴きまことにありがとうございました。

基調報告 「日新塾を掘る」

関口 慶久氏（水戸市埋蔵文化財センター所長）

水戸市埋蔵文化財センターの関口と申します。今回は日新塾の発掘成果を中心に、加倉井砂山や日新塾の歴史についてご報告をさせていただきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。

1 加倉井家と砂山の生涯

成沢加倉井家について はじめに加倉井家の来歴についてお話させていただきます。日新塾を主催した加倉井砂山が生まれたのは、文化2（1805）年です。

本名は久雍ひさのりまたは雍のりと言いますが、今回は一般に馴染みのある砂山という号で統一したいと思います。

砂山は成沢加倉井家当主・久泰ひさやすの次男として生まれました。成沢加倉井家の出自は、南北朝時代に遡ります。当時の水戸には、波木井氏という武士団がいました。元中5（1388）年頃、波木井通久が、当時水戸地方に勢力を拡大していた豪族・江戸氏の重臣となり、加倉井姓を称するようになります。そして約150年後の享禄3（1530）年に、加倉井本家第12代当主重久の弟である加倉井淡路守忠光が分家し、成沢に館を構えました。この忠光を祖として、成沢加倉井氏が成立します。

ここで「淡路」という名前が出てきました。実は砂山も「淡路」を名乗っていますが、そのおおもとは室町時代後期の、砂山の先祖の名前に遡るわけです。なぜ砂山が淡路を名乗ることになったのかは最後にお話しますので、頭に止めておいて下さい。

砂山の出自である成沢加倉井家は、中世から由緒が続く家系ということになります。そして成沢加倉井家の本拠地、すなわち城館は、現在の日新塾ではなく、日新塾からほど近い、加倉井忠光館跡という場所になります（本書15頁11参照）。

成沢加倉井家は忠光を祖として、長男の石見守忠久いしかのりが2代目当主となります。忠久は日蓮宗（当時は法華宗）の寺院である、成沢山蓮聖寺を建立したと伝えられています。蓮聖寺は江戸時代後期以降に廃寺となったとされ、現在、建物は残っていませんが、伽藍があったと思われる平場や墓が残るなど、近世の景観をよく止めています。この墓地に、市指



発掘成果を報告する関口埋蔵文化財センター所長

定文化財の「加倉井砂山夫妻の墓」があります。

2代忠久の後には、3代淡路久行、4代友久、5代常久と続いていきます。恐らく3代久行か4代友久のあたりで中世から近世に移りし、武士から百姓へ帰農したものと思われませんが、資料がないため詳細は良く分かっていません。5代常久は水戸藩有林を管理する職である大山守に任じられるなど、村内でも有力な地位にあったものと思われま。

こうして近世初期から村内有力者としての地位を固めたと思われる成沢加倉井家は、6代目の兵左衛門久通の代になり、大山守を継承するとともに、はじめて成沢村庄屋になったと伝えられています。

先ほど淡路という名前が出ましたが、ここで「兵左衛門」という名前も出てきました。この兵左衛門もまた、成沢加倉井家に縁が深い名前になっていきますので、覚えておいて下さい。

6代久通の後には、7代兵左衛門久氏、8代兵左衛門久徴と続きます。8代久徴は成沢加倉井家の家勢を高めた当主として知られています。久徴は寛延元（1748）年に成沢村庄屋、明和5（1768）年に大吟味方御用達を歴任し、水戸藩郷土に取り立てられました。安永4（1775）年に20石を賜り、その直後に家督を譲って隠居したものと考えられます。文化6（1809）年には第7代水戸藩主の徳川治紀が御成しています。その3年後の文化9（1812）年に享年85歳で亡くなりました。

次に家督を継いだのが、砂山の父である9代兵左衛門久泰です。久泰は宝暦11（1761）年に生まれ、久徴の在命中に家督を継いで、安永5（1776）

年に庄屋を務めました。安永8（1779）年には50石を賜り、水戸藩郷土となっています。また、天明8（1788）年には西坪に屋敷を新築し、そこに移ったとされています。これが現在の日新塾跡です。

近世にはこうした庄屋クラスの学識の高い人々が、屋敷を開放して私塾や寺子屋を運営することがあります。久泰もこの西坪の新屋敷内に私塾を創設し、郷村教育に携わりました。これが後に日新塾と呼ばれるわけです。したがって私塾を創設したのは砂山ではなく、父久泰であり、それをさらに発展させたのが砂山ということになります。

久泰の在命中に10代目の家督を継いだのが、砂山の兄である兵左衛門久継です。しかし久継は文政3（1820）年に27歳の若さで早世してしまいます。そして、早世した兄の跡を継ぐ形で11代として家督を継いだのが、加倉井砂山です。

加倉井砂山について 文政3（1820）年に16歳の若さで家督を継いだ砂山はすぐに郷土に取り立てられ、淡路久雍と名乗りました。これまでの成沢加倉井家当主は、6代から10代まで兵左衛門を名乗っていましたが、砂山は兵左衛門を世襲せず、初代と3代が名乗った淡路という古い名前を名乗ります。

天保10（1839）年、砂山は又隈村の庄屋を勤めます。成沢加倉井家はこれまで成沢村の庄屋を家職としていましたが、又隈村庄屋を勤めたのは砂山だけです。35歳の時でした。同年に父久泰が亡くなっています。

次に砂山の学歴についてお話しします。砂山の幼少期は、父の久泰に学びました。7歳で孝経を暗誦したというので、相当早熟ですね。11歳からは叔父の加倉井松山（忠珍）に学び、その後、江戸遊学を志すも断念し、家督を継いだ文政3（1820）年には、郷村の子弟教育を始めました。16歳にして学問を教わる側から、教える側になったということです。砂山の優れた教育者としての名声は次第に広まり、日新塾は多くの塾生を輩出するマンモス私塾へと発展していきました。

こうして砂山は庄屋として郷村経営を担いつつ、教育者としての名声を高めていきます。天保11（1840）年には第9代藩主の徳川斉昭が検地のために砂山宅に御成します。斉昭に知己を得た砂山は、天保13（1842）年には好文亭の宴に召され、翌14（1843）年には斉昭に供奉し江戸に上っています。

このように天保期は、藩主斉昭が改革を推し進め

た、水戸藩の変革期でありましたが、当時20代後半から30代の砂山もまた、新進気鋭の郷土として名声を博していきました。

しかし40代になると、病のため湯治に行くなど体の衰えが目立ちはじめ、安政2（1855）年7月14日に病気のため亡くなりました。享年51歳でした。

2 日新塾を知るために

次に日新塾を理解するための基礎資料である、絵図資料・伝記資料・考古資料について御説明します。**絵図資料** 絵図資料として重要なのが、『贈正五位加倉井砂山先生略傳』という冊子に掲載されている絵図です（以下「絵図」と呼びます（本書18頁27参照）。

この絵図は、近世の日新塾の間取りを示す唯一の資料です。絵図が掲載されている『贈正五位加倉井砂山先生略傳』という冊子は、昭和3（1928）年、昭和天皇の即位の礼にあわせて、砂山に「贈正五位」の官位が贈られたことを記念して、弓野國之介という方が著わしたものです。この本は非売品なので、狭い範囲のみにしか流通しなかったようです。現在は非常に稀少な冊子となっています。

くだんの絵図はこの本の口絵に掲載されています。口絵の隣のページには注釈があり、「茨城郡成沢村に於ける先生の住宅及日新塾の略図でありまして、明治十年全焼したれど、図面は幸ひにして厄を免れました。」と書いてあります。この注釈によって、明治10（1877）年建物焼けてしまったことと、間取りを示す略図が焼け残ったということが分かります。

一方で、絵図の真正性については、日新塾の価値を正しく評価するうえで、しっかりと検証していく必要があります。真正性は、「いつ（When）」、「どこで（Where）」、「誰が（Who）」、「何を（What）」、「何のために（Why）」、「どのように（How）」という、5W1Hをもとに確認します。では絵図を5W1Hに沿って検証してみましょう。

まず「いつ描かれたのか（When）」ですが、注釈により明治10年の焼失前に描かれたことは分かりますが、正確にいつ描かれたのかは分かりません。次に「どこで描かれた（Where）」のか、「誰が描いた（Who）」のか、「何のために描いた（Why）」のか、「どのように描いた（How）」のかということですが、

これは一切不明です。

唯一分かるのは、「何を描いた (What)」のかということで、母屋や塾の略図であることは間違いありません。

したがって、真正性を測る6つの示標のうち、判明するのは一項目のみということになり、残念ながらこの絵図は、現時点では真正性があまり担保されていないと評価せざるをえません。絵図が現存していれば、もう少し細かい検証ができるはずなのですが、本の口絵に掲載されているのみで現存していないため、真正性の再検証も難しい状況です。

しかしながら、この絵図には近世日新塾の敷地内の建物配置はもとより、建物内の間取りも描かれており、情報源としては大変有用です。また、同様の資料がないので、唯一の資料でもあります。そのため、真正性が担保されていないという点については注意が必要なものの、現在の意義は非常に大きいと考えています。私も日新塾を発掘する際に、常にコピーを携帯し、参照していました。

伝記資料 次に伝記資料ですが、これは弓野國之助という人が大正年間に書いた『加倉井砂山』という著作を指します。この本は全425ページに及ぶ非常に大部な本で、加倉井砂山を知るうえで無くてはならない基本文献です。

著者の弓野國之助は城里町石塚出身の教育者・記者・郷土史家です。彼は砂山の事績が人々の記憶から薄れていくことを憂い、伝記を新聞「いはらき」に連載しました。著作の『加倉井砂山』はこの連載をまとめ、大正11(1922)年に刊行したものです。先ほど鈴木先生もお話しされましたが、連載された77回分が全て収録されているわけではありません。未記載の部分は常々読んでみたいと思っています。

弓野は伝記を書くにあたり、当時残っていた砂山関連資料とともに、存命していた門下生や親族、古老の聞き取り調査も行っています。砂山を直接知る人がいない現代にあって、これは大変貴重な情報です。こうしたことから、本書は大部の著作ということもより、今では調べようのない情報がふんだんに盛り込まれた、砂山研究の第一の書と評価できるわけです。

考古資料 次に、私の専門になりますが、考古学的な発掘調査資料です。

発掘調査は平成16年度から平成27年度にかけて、合計8回実施しました。その結果、近世から近代の日新塾を確認することができました。

このスライド(本書20頁37参照)は、日新塾跡地の一部を深く掘りぬいた地層の写真です。補助線を引いていますので、土の色の違いが見えると思いますが、その違いは時期の違いを表しています。

黄色の土は平成16(2004)年から現代まで。

薄い黒色の土は明治10(1877)年から平成16(2004)年まで。

濃い黒色の土は明治10(1877)年から近世まで。

黄色混じりの黒色の土は古代から江戸時代まで。

となつています。日新塾の最下層の部分からは古代の溝跡や遺物も出土しています。

日新塾跡地の土地利用は、このように少なくとも四つの時期に分けることができます。そしてこのそれぞれの地層の上から、日新塾の学びを伝える遺構や遺物が発見されました。

それでは次に、絵図資料、伝記資料、考古資料という三つの情報源から、近世や近代の日新塾を振り返っていききたいと思います。

3 近世の日新塾

まず近世の日新塾について。絵図には、様々な建物や工作物が描かれていることが分かりますが、その一つ一つを確認していきましょう。

門 はじめに、正門と目隠門について。日新塾には入り口が二つあり、正門が一つ目の門で、第一の門と言えます。そして正門の後ろに目隠門という門があります。正門から中を見た時に見えないよう、目隠をするために設けた工作物ということですね。

更に目隠門の右斜め上には松が描かれています。そこに注釈があります。注釈には、「源烈公天保御検地二当り…」と書いてあります。源烈公とは、水戸藩第9代藩主徳川斉昭のことです。すなわちこの松は、斉昭が天保11(1840)年に検地で砂山宅に御成したことに由来するものと考えられます。お手植えの松かしれません。

次に、東門について。これは敷地の東側にあることから、私が便宜的に東門と呼称しているものです。東門も正門と同様、門の正面奥に塀があり、中を見通せないようになっています。

母屋 次に母屋について。これがメインの建物になります。絵図を見ると、玄関の右と左で空間の違いを見て取ることができます。どういう空間なのかというと、右側の空間が日常の「ケ」の空間で、左側が非日常の「ハレ」の空間であったと考えられます。

(本書 21 頁 44 参照)。

では日常の空間である「ケ」の空間はどのような部屋があったのでしょうか。まず、玄関奥に図書室があります。玄関隣には「先生」と書いてある場所があります。ここで砂山は塾生を教えていたのでしょう。さらに手前には、「塾長」や「高弟」という部屋があったことが分かります。興野道甫や齋藤監物といった高弟らに宛がわれ、高等教育が行われていた部屋だと思われます。さらに「手習場」という部屋があり、ここで初等教育が行われていたのかもしれませんが。奥に「階場」とある大きな空間が食堂です。その右には「台所」や「風呂」という空間もあります。

絵図を見ると、教育関係の空間に比べて、食堂と台所が図抜けて広いことが分かります。食堂と台所がこれだけ広い近世の民家はあまり見たことがありません。このことから日新塾が門下生の出入りが多い場所であったことが窺えます。

さらに手習場の下を見て下さい。ここに「二階は寄宿舎」と書かれています。すなわちこの建物は、二階建てであるということが分かります。当時の百姓の屋敷で二階建てというのは珍しいことです。

さて、こうしたケの空間を発掘したところ、桶を埋した遺構が検出されました(本書 21 頁 45 参照)。丸い部分が二つあり、これが水桶の跡になります。この桶は台所に備え付けられた水桶と思われます。水場としてはかなり大きいものです。日新塾には多くの寄宿生もいましたから、一日に必要な水も多かったでしょう。発掘された水場は、文字通り日新塾の台所事情を表した遺構と言えます。

次に、非日常空間の「ハレ」の空間についてですが、こちらからは、最下層から母屋の礎石が見つかっています。

書院 次に、母屋の北側に位置する書院についてです。これまであまり注目されていませんでしたが、母屋とは別棟になっており、廊下で繋がっていたことが分かります。書院は2部屋の小さな建物で、砂山専用の書斎と図書室がありました。また、廊下には書棚が並べられていました。書院専用の庭もあります。

すなわち書院は砂山のプライベートスペースであり、一番格の高い部屋だったものと思われます。

三楽楼・有隣館 次に、正門の隣に描かれた三楽楼と有隣館という塾舎です。

『加倉井砂山』によれば、三楽楼は文政9(1826)

年に建設された、二階建て3間×5間の建物で、高級生徒の教室に充てられたようです。三楽楼の床の間には、会沢正志斎の書「君子有三楽」を掲げていたと言われています。

その隣に渡り廊下で繋がっている、さらに大きい建物が有隣館です。有隣館は天保13(1842)年に建設されました。平屋建て4間×6間の建物です。平面規模で言えば、三楽楼より一回り大きく、日新塾で2番目に大きい建物と言えます。

発掘調査では、三楽楼と有隣館の跡を見つけようとして、何度も調査をしていますが、未だに発見できていません。発見できていない理由としては、地下が大分攪乱されていることや、考古学的に検出しにくい建物であったかのどちらかだと思います。

その他の建物等 その他の建物として、物置と厩がありました。ここには馬を3頭飼置き、乗馬の稽古を行っていた。

さらに絵図の右下には「源齋明公日新塾ノ御上覧場」という文字が描かれています。天保11(1840)年7月に齊昭は水戸藩で最初の検地を行い、日新塾に御成しています。『加倉井砂山』では「此日は俄天氣で、焦り焦り照りつける所に公等は野立ちして、検地を御覧になって居たが…」と書かれています。絵図に描かれた上覧場は、こうした齊昭の野立の場所であったのでしょう。

次に塙です。塙の遺構は考古学的に見つけやすいものです。写真の白い部分が柱の跡です。柵列が11間以上と大変長いものでした。

さらに日新塾の南側の道を挟んだ部分を発掘したところ、農作物貯蔵遺構が検出されました。分かり易く言えば貯蔵穴ですね。当時日新塾に寄宿していた塾生たちが、食料を賄うために作られたものと考えられます。

私は、これは大切な情報だと認識しています。農作物貯蔵遺構の存在は、日新塾の敷地の外にも、日新塾の運営に必要な設備等が備えられていたことを証明するものと考えられるからです。

千人規模の私塾を円滑に運営するには、相当の設備と物資とマンパワーが必要はなすです。そのためには日新塾という狭い空間だけでは成り立つはずはなく、地域の協力が必要はなすです。例えば日本最大の私塾として知られる大分県日田市の成宜園も、隣接する豆田町が塾生のサポート機能を担うなど、地域ぐるみの連携があったのです。

このように考えると、日新塾は日新塾だけで成り

立っていたのではなく、咸宜園と同様に、地域ぐるみの協力があつたからこそ成立・発展し得たのだと、私は思っています。

オランダ陶器 さて、遺物の話に移りましょう。写真は日新塾出土のオランダ陶器です（本書23頁55参照）。先ほど鈴木先生が「砂山が晩年に蘭学を学んでいた」とおっしゃっていましたが、オランダ陶器はそれを裏付ける遺物です。

当時、オランダ陶器のような舶来品は、長崎の出島を通じてしか流通しないもので、特注で買求める必要がありました。オランダ陶器は江戸では時々出土しますが、県内ではこれ一点しか出土しておらず、比較的珍しい遺物です。

塾の名称について 先ほど鈴木先生が御紹介されていましたが、塾長の興野道甫は日新塾の建物として、「三楽楼、不知老齋、行伍塾、万甫楼、有隣館、日新舎、皆書齋名也」と書いています。しかし絵図には有隣館と三楽楼しかありません。これはどういうことなのでしょう。絵図に描かれていない不知老齋・行伍塾・万甫楼・日新舎の四つは、果たして実在したのでしょうか。

これについては想像の範疇を超えませんが、私は、これらは必ずしも建物を指した名称ではなく、部屋を指した名称も含まれていると考えています。事実、興野はこれらを「皆書齋名也」としており、建物に限定していないのです。

それでは、「建物」と「部屋」ということに注目してもう一度よく考えてみましょう。三楽楼・万甫楼の「楼」は、見晴らしのよい楼閣の部屋を示すことがあります。例えば、借楽園にある好文亭の三階部分は楽亭楼と言います。楽亭楼は好文亭という建物の一室にしか過ぎません。このように、楼は二階以上の部屋の名前であると考えられます。

同様に不知老齋の「齋」もまた、書斎などの部屋を表す文字と解釈することができます。

一方、行伍塾の「塾」、有隣館の「館」、日新舎の「舎」は、建物の名前であると考えられます。すなわち「三楽楼、不知老齋、万甫楼」は部屋のことを、「行伍塾、有隣館、日新舎」は建物のことを示していると考えられるのです。

そこで絵図をもう一度よく見て下さい。絵図には、「有隣館、三楽楼、母屋」の三つの文字があります。そのうち三楽楼は2階部分を示すとすると、三楽楼のある建物の総称は、行伍塾と呼ばれていたのではないのでしょうか。母屋も同様です。後世に日新塾と

総称されたことを考えると、「日新」の名を冠する日新舎は、塾舎の中心である母屋が相応しいと私は考えています。そして母屋には2階がありますから、その2階部分が万甫楼と呼ばれていたのではないのでしょうか。残る不知老齋は、砂山の書齋である書院が相応しいでしょう。

- もう一度整理しますと、
- ・母屋…日新舎。うち二階は万甫楼。
- ・書院…不知老齋。
- ・3間×5間の塾舎…行伍塾。うち二階は三楽楼。
- ・4間×6間の塾舎…有隣館。

となります。あくまでも想像に過ぎませんが、絵図との整合性はあると思います。このように分析していくことで、ある程度、建物の特定はできるのではないのでしょうか。大方のご批判をお待ちしたいと思います。

門人数 さて、水戸郷土かるたには「門人多彩な日新塾」という札がありますが、日新塾の特色の一つは、その門人数の多さです。そこで次に、日新塾で学んだ門人の数を見ていきたいと思ひます。

鈴木先生は、門人数は延べ1,000人を下らないと推計されています。一般的な私塾・寺子屋の門人数は平均して100～数十人程度ですので、延べ人数1,000人超というのは、全国でも稀少な大型私塾、言うなればマンモス私塾と言って良いのではないかと思います。

マンモス私塾の類例としては、日本最大の私塾であり、約5,000人が学んだ大分県日田市の咸宜園、約3,000人が学んだ京都府京都市の古義堂、約1,000人が学んだ大阪府大阪市の適塾が挙げられます。

私は、マンモス私塾の必要条件として、塾もしくは塾主の教育的魅力はもちろんのことですが、塾への通いやすさも注目すべき要素だろうと思っています。実際に、咸宜園は豆田町との距離が500メートルと徒歩圏内、町中にありました。古義堂は京都御所と二条城の間にあり、京町屋の真ん中でした。適塾も大阪城の近くの町屋の中に在所していました。

ところが日新塾はというと、水戸城下からの距離は10キロ以上あります。しかも内陸部ですので、お世辞にも通学しやすさとは言えないのです。そんな通学に不利な立地でありながら、マンモス私塾にまで発展したというのは驚異的で、我が国の私塾の中でも異色の存在と言えるでしょう。

4 近代の日新塾

近代日新塾 安政2(1855)年に砂山が病気で亡くなった後は、長女の秀(桃篠)が近郷の子弟教育を継続しました。なお、長男の久は元治元(1864)年の那珂湊合戦で戦死しています。その後、明治10(1877)年に日新塾は焼失しますが、間もなく再建されます。再建された建物に特定の名称があったかどうかは分かりませんが、私は近世の日新塾と区別するため、これを近代日新塾と呼んでいます。

スライド(本書25頁70参照)は、水戸市史を編纂する際に測量された近代日新塾の敷地図面です。近代日新塾の敷地には、門・母屋・離れ・蔵・板蔵の5つの建物がありました。建物を一つ一つ見ていきましょう。

母屋 まず母屋ですが、入り口には破風がつき、大分風情があります。残念ながら平成16(2004)年に解体されてしまいましたが、発掘調査により埋蔵文化財として奇跡的に現存していることが判明しました。母屋の真下に礎石が検出され、規則的に並んでいることが判明しました。この礎石を結ぶと近代母屋の間取りが復元できるのです。

離れ 次に離れですが、この写真は半分荒れ果てていますが、建築史家で近代日新塾を調査した一色史彦先生によれば、これは近世の建物だそうです。離れについては、後ほど改めてお話しします。

蔵・板蔵・門 蔵は近代の建物で、隣にある板蔵は焼け残った近世の建物になります。板蔵は書庫として仕様されていたようで、現在県立歴史館に所蔵されている書物はこの板蔵に所蔵されていました。またこの板蔵には、現在水戸市の指定文化財にもなっている木札(「日新塾母屋棟札」)が打ち付けられていました。

次に門ですが、これは近代の門で、互も近世のものではありません。

以上、近代日新塾の建物を御紹介しましたが、もう一度まとめると、近代日新塾には近世と近代の建物が混在していたことになります。離れと板蔵は近世の建物で、母屋・蔵・門は明治10(1877)年の火災以降に再建された近代の建物です。

近代日新塾の意義 再建された建物のうち母屋については、一色先生は極めて伝統性が強い建築物と評価しています。つまり、単なる再建建物というよりは、近世の遺風を受け継いで再建されたものだと考

えられるのです。

近代日新塾で教育が行われたという記録はありませんので、恐らく私塾教育は久泰・砂山・秀の3代で途切れたことと思います。一方で、近世の遺風を受け継いだ近代日新塾は、砂山の遺徳を慕う者のシンボリックな建物になったことはまず間違いのないと思います。砂山の名声は近世に高まりましたが、その名聲が確立されたのは近代以降でした。大正10(1921)年に新聞「いはらき」誌上で加倉井砂山の連載が行われ、昭和3(1928)年に砂山に正五位が贈位されています。さらに、昭和17(1942)年には財団法人日新塾精神顕揚会が設立するなど、砂山の遺徳や生涯が多くの人々に知られるようになるにつれ、近代日新塾は砂山とその教育を偲ぶための象徴的存在となっていったと意義付けできるので

す。砂山の遺徳が近代日新塾においても偲ばれていたであろうことは、発掘調査からも判明しています。先ほど御紹介しました日新塾出土オランダ陶器は、実は江戸時代ではなく、明治時代のゴミ穴から出土しているのです。陶器をよく見ると、縁の部分が細かく砕けているのですが、欠けた破片を丁寧に漆で接合して修理していることがわかります。私はこの修理痕は、近代日新塾に暮らした砂山の子孫の方々が、砂山を偲ぶために大切に継承されていた証拠だと思っています。

解体、発掘、そして日本遺産へ 戦後になると砂山を顕彰する機運は次第に薄れていき、昭和58(1983)年の読売新聞には「日新塾が崩壊寸前」といった記事も掲載されました。こうした状況を憂い、昭和62(1987)年には地元有志による加倉井砂山顕彰会が設立され、翌年に市森林公園に砂山の銅像が建立されました。

しかし近代日新塾の荒廃ぶりは著しく、平成16(2004)年について解体を余儀なくされます。通常、こうした建物が失われると、日新塾や砂山の歴史は書物のみでしか語り継がれないようになってしまうのですが、その後が重要でして、平成16年から8回にわたり、水戸市が発掘調査を行います。

これが日新塾の保存・活用の転機になったと私は考えています。その成果はこれまでお話ししたとおりですが、近代日新塾はもとより、近世日新塾の遺構が残っていることが判明し、その学術的価値が評価され、平成21(2009)年には市史跡に指定されました。さらに平成27(2015)年には、日本遺産「近

世日本の教育遺産群「学ぶ心・礼節の本源」の構成文化財としての認定も受け、全国的にも知名度が向上していくのです。

5 加倉井忠光館と日新塾

本筋から外れますが、ここで加倉井忠光館と日新塾の関係についてちょっとだけお話させていただきたいと思います。

冒頭で、加倉井兵左衛門と加倉井淡路という二つの名前を覚えておいて下さいと申し上げました。

加倉井忠光館は成沢加倉井家の本家であり、日新塾は砂山の父である久泰が忠光館から出て新たに建築した屋敷です。江戸時代後期には、この二つの屋敷が、成沢加倉井家の二大拠点になったわけです。そして加倉井忠光館は砂山の弟である加倉井久成が兵左衛門の名跡を継ぎ、成沢村庄屋になりました。

一方、加倉井砂山は淡路の名跡を継ぎ又隈村の庄屋になりました。

このように、江戸後期の成沢加倉井家は、兵左衛門と淡路という二つの名跡を、二つの屋敷の当主がそれぞれ引き継ぎ、そしてそれぞれが庄屋を勤めるという構図になるわけです。

ここに加倉井忠光館の屋敷図があります（本書28頁88参照）。扉に開かれた豪勢な説であることが分かります。御成門とありますが、これは水戸藩主が御成の時に使用した門です。そして藩主を迎えた建物は御成御殿と呼ばれ、4間×6間程度の大きさであることが読み取れます。そしてこの建物とほぼ同じ大きさの建物が、近代日新塾の離れです。離れは本家から移築されたという伝承も残っていま

すし、内装も相当高い格式だったことも判明しています。

近代日新塾の離れは、加倉井忠光館の御成御殿を移築したものと見て間違いありません。そのため近代日新塾は、図らずも御成御殿という、成沢加倉井本家の栄光の時代の遺構をも内在する、貴重な存在だったと言えるのです。

5 まとめ

これまでの報告で、おわかりになって頂けたかと思いますが、日新塾の文化財的価値は、近世日新塾の遺構が現在も地下に残っていることが第一に挙げられます。そして第二に、近世日新塾の遺構の真上に良好に現存している、近代日新塾の遺構もまた、加倉井砂山、そして成沢加倉井家の歴史をよく伝える文化財として、重要な価値を有しています。

すなわち近世日新塾は砂山の遺跡、近代日新塾は砂山顕彰の遺跡としての価値があり、それぞれの価値が重層的に一つの場所に残っているというのが、日新塾跡の大きな文化財的特徴なのです。更に御成御殿のように、日新塾は単なる私塾の遺構というだけではなく、地域の歴史を物語るうえでも重要な遺構をも内在しています。

私たちはこうした遺産を、地域のかげがえのない宝として、正確に、大切に、そして愛情をもって、次世代に守り伝えていかなければなりません。そのためには、市民の皆様と行政とが手を携えていくことが重要だと思っています。どうかこれからも、日新塾の保護・保存に御理解、御協力のほど、よろしく願いいたします。

加倉井孝臣氏（一般財団法人日新塾精神顕揚会理事長）

ご紹介いただきました、一般財団法人日新塾精神顕揚会理事長の加倉井孝臣でございます。今日は、明治維新150年記念日本遺産講演会「日新塾を考える」にお招きいただき、誠にありがとうございます。

本日はお忙しい中、大変貴重なお話をいただきました。橋本先生と鈴木先生には改めて御礼申し上げます。また、このような素晴らしい講演会を開いていただきました。水戸市教育委員会の方々にも感謝申し上げます。

私ども、一般財団法人日新塾精神顕揚会は、昭和17年に設立された大変古い財団でございます。創設者は日新塾の門弟では珍しい存在で、経済界や金融界において名を成しました。川崎財閥の創始者であります、川崎八右衛門という人物です。

はじめに、当財団の使命でございますが、加倉井砂山が創立いたしました、日新塾の維持・管理・保存と日新塾という私塾の優れた教育方針等を後世に伝承することでございます。

私は15年程前から理事長を務めさせていただいております。また、私は加倉井砂山から見まして、6代あとの子孫でございますが、元々は川崎の出身でございます。父が加倉井家の養子になったため、現在、加倉井の姓を名乗っております。

本日のご講演を聞かせていただき、私の知らなかったことを含めまして、様々なことを学ばせていただきました。

この講演会は明治維新150年の記念行事だと聞き及んでおりますが、明治維新において、日本が近代国家として世界にも類を見ない発展を遂げたことは江戸時代末期の高度かつ広範な教育システムがあったからだと思存します。

橋本先生や鈴木先生のご講演から、改めて私塾の存在意義の高さや日新塾のすばらしさを感じました。また、水戸市埋蔵文化財センター所長の関口さんには、日新塾を何度も発掘していただき、貴重な歴史遺産を発見していただいております。



講評・挨拶される加倉井理事長

当財団の活動でございますが、我々は小さな財団でして、できることにも限りがございます。今後も身の丈に合った活動を地道に行ってまいりたいと考えております。

具体的に申しますと、日新塾の知名度をより向上させることでございます。我々は普段東京で生活しておりますが、月に数回、理事会や評議員会などで水戸を訪れます。しかし、水戸駅からタクシーに乗り、「日新塾に向かってください。」という多くの運転手の方が日新塾のことを知りません。その様な状況ですので、日新塾の価値をより発信し、認知度の向上を目指していきたいと考えております。

また、茨城県立歴史館には、明治10年の火災の際に残りました教材や教科書、書簡などが1,800冊以上所蔵されております。この書籍を専門家に見て、精査・分類していただきたいと考えております。さらに、鈴木先生のお話にもありました興野道甫のような門弟の子孫の方が数多くいらっしゃいます。その方々のご自宅に残っております加倉井砂山の手紙などの資料につきましても収集し、日新塾の価値をより正確に検証していきたいと考えております。

以上を持ちまして、私の挨拶並びに講評とさせていただきます。本日はありがとうございました。



MITO
明治維新
150
The Tokugawa Museum
The Tokugawa Museum
Project for World Cultural Heritage

明治維新150年記念日本遺産講演会

日新塾 を 考 え る



北関東最大の私塾と称される日新塾。
近世教育史等をはじめとする専門家からの講演を通じて「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」として日本遺産の構成文化財に認定された日新塾で行われていた教育と日新塾で学んでいた学生の生活について、理解を深め、その重要性を再認識しましょう。

平成30年12月1日(土) 13:00~17:00

会場 総合教育研究所3階 視聴覚ホール
〒310-0852 水戸市笠原町978-5 TEL:029-306-8132

参加無料
定員
200名

講演

基調講演

近世日本における「塾」という空間

橋本 昭彦氏 (国立教育政策研究所)

加倉井砂山と日新塾の教育

鈴木 暎一氏 (茨城大学名誉教授)

報告

日新塾を掘る 関口 慶久氏 (水戸市埋蔵文化財センター所長)

申込み方法

往復ハガキもしくはメール (rekishi-event@city.mito.jp) でお申し込みください。

「明治維新150年記念日本遺産講演会」と明記のうえ、

①名前 (振数の場合は全員の氏名) ②住所 ③電話番号を記載してください。

定員を超える場合は抽選にて決定し、当選者には郵送にて通知いたします。

申込み期間

平成30年11月1日(木)~11月20日(火)

【お問い合わせ】 水戸市教育委員会事務局歴史文化財課世界遺産推進室

〒310-0852 水戸市笠原町978-5 TEL:029-306-8132 / FAX:029-306-8693 / MAIL: isan@city.mito.lg.jp

講演会周知のために制作したチラシ/ポスター

1 日新塾跡の歴史

日新塾跡は、水戸市成沢町 364 番地に所在する江戸時代の私塾跡です。母屋のほかに三楽楼・有隣館等の建物がありました。現在は遺跡となっています。その重要性から平成 22 年には、市の史跡に指定され、平成 27 年には弘道館や偕楽園とともに、文化庁の日本遺産に認定されました。

年	できごと
江戸時代後期	加倉井砂山の父、久泰が私塾を開設
1824 (文政 7) 年	父に代わって私塾を主宰
1855 (安政 2) 年	加倉井砂山、病没
1877 (明治 10) 年	母屋、塾舎などが焼失、その後母屋を再建
2004 (平成 16) 年	明治時代に再建した母屋が取り壊される
2015 (平成 27) 年	日本遺産「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」の構成文化財に認定



日新塾の古絵図

出典：弓野福之介 1926『蘭正五位加倉井砂山先生略傳』



現在の日新塾跡

2 日新塾を開いた加倉井砂山

加倉井砂山 (1805-1855) は茨城県成沢村 (現水戸市成沢町) の郷土 (農村に住みながら武士の待遇を与えられた者) の出身で、20 歳頃から父久泰の開いた私塾を引き継いで自宅に日新塾を開きました。砂山は「人間は日々新しくならなければならない」という「日新」の精神を率先して実践し、晩年には独力でオランダ語を学び始めました。

水戸市が実施した日新塾跡の発掘調査の際にオランダ陶器の碗 (水戸市指定文化財) が出土していますが、このオランダ陶器は日新塾で蘭学を取り入れていたことを窺わせる物証です。



加倉井砂山肖像画 (個人蔵)



日新塾跡出土オランダ陶器
(水戸市埋蔵文化財センター所蔵)

講演会当日にロビーに掲示した日新塾紹介パネル (その 1)

3 日新塾の多彩な教育と豊富な蔵書環境

日新塾では、学芸（習字・読書・作詩・作文・地理・歴史・数学・兵学など）と武芸（剣術・馬術・砲術など）、医学など多彩な教科科目が教えられていました。当時使われていた教科書類は現在、茨城県立歴史館に所蔵されていてその数は1,824冊にもなります。



日新塾で使われていた教科書
(茨城県立歴史館所蔵)

4 日新塾で学んだ主な人々

日新塾で学んだ塾生の数は30年間で述べ1,000人を超えと言われています。

日新塾で学んだ塾生は、江戸時代の終わりから明治時代にかけて様々な場面・分野で活躍しました。



さいぜん さいとう
齋藤藍物

板田門外の変に参加。
出典：『江戸幕府』(江戸市立博物館)



たいぶち せうめい
鯉淵要人

板田門外の変に参加。



ふじた こうしろう
藤田小四郎

元治甲子の変(天狗党の乱)に参加。

出典：『歴史研究』(江戸市立博物館)



きゆうの どう ぽう
興野道甫

日新塾の塾長を務める。元治甲子の変(天狗党の乱)に参加。



か かわ けい せう
香川敬三

京都で活躍。新政府軍として戊辰戦争に参加。伯爵。

出典：『歴史研究』(江戸市立博物館)



かわさき はち へもん
川崎八右衛門

川崎討問の基礎を築く。

出典：川崎定徳株式会社ホームページ

講演会当日にロビーに掲示した日新塾紹介パネル(その2)

明治維新 150 年記念日本遺産講演会
日新塾を考える 記録集

2019 年 2 月

編 集：水戸市教育委員会事務局教育部
歴史文化財課世界遺産推進室

発 行：水戸市

〒 310-8610

茨城県水戸市中央 1-4-1

TEL：029-224-1111（内線 6162）

FAX：029-297-6187

E-mail：isan@city.mito.lg.jp



「人は日々新しくならなければならない」
（『四書』『大学』より）の精神を率先・実践
した塾主の加倉井砂山